

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
平成三十年六月一日発行(毎月一回一日発行)
第十七卷 第三号(通巻一九五号)

万象

B A N S Y O

六
月
号

2018. 6



六月の句

銜して山ほととぎすほしいまゝ

杉田久女

杉の美林、櫛の原生林におわれ見渡すかぎりの
青々とした霊峰に銜して鳴いている時鳥。

その鳴き声は「てっぺんかけたか」「特許許可局」
と、さまざまに聞き做されている。

時鳥の独壇場の一山を、作者は「ほととぎすほし
いまゝ」と言い切った。

この句の眼目である「ほしいまゝ」を得るまでに
久女は、幾度も英彦山を訪れたという。

改めて下五の大切さを実感する一句である。

『杉田久女句集』所収。「英彦山六句」。

(林 陽子)

平成三十年

六月号

万象

B A N S Y O

おうい雲くもよ

ゆうゆうと

馬鹿ばかにのんきさうぢや（そうじや）ないか

どこまでゆくんだ

ずつと岩城平いわきたいらの方ほうまでゆくんか

山村暮鳥やまむらぼちょう「雲」

万 象

平成 30 年 6 月号

名誉主宰作品 水ぬるむ 大坪 景章 4

主宰作品 松の花 内海 良太 5

風 音 集

小林 愛子他 6

続・万象と共に⑩ 浅草界隈から三筋町界隈まで 内海 良太 9

同人作品

内海良太選 10

同人作品の佳句 内海 良太 33

桜花爛漫の浅草で 第十五回「万象」同人会総会開催 増田 幸子 34

同人特別作品

水温む 西本 才子 38

オホーツク海高気圧 玉田 瑞穂 39

内海良太句集『青嶺』自選句鑑賞⑮

うりずんやみやらび句碑と小半日 前田貴美子 40

オーデコロン黒人姉妹歌ひ出す 大湾 宗弘 40

小林愛子句集『辻楽師』自選句鑑賞⑮

白菖蒲に囲まれ昼を眠りたる 井村 和子 41

あやとりの橋伸びきつて春の昼 疋田 華子 41

特別作品評(四月号) 水野 加代 43

同人作品評(四月号) 広瀬 俊雄 44

万象招待席 蜥蜴出づ 阿部 澄 46
初 午 佐藤 嘉洋 47

万象ノオト「時計」 竹重富子、阿部より子、佐藤正美、岡村純子、奥山ひろ子、高田みや子 48

私の一冊 岸本葉子著『俳句で夜遊び、はじめました』 卯辰 美苗 50

郷土の俳人^⑮ 俳人木村三男 栃木 亀田やす子 51

俳書探訪 古川 京子 52

蕪村処々^⑮ 山蟻のあからさまなり白牡丹 蕪村(新花摘) 福田 雅子 53

巻頭作家(五月号)プロフィール 桔梗 純(町田) 山本 右近 54

万象作品

飛高隆夫選 55

万象作品の佳句 飛高 隆夫 71

選者のはなし^⑳ 三屋 英俊 73

芳子先生を偲んで「季節風」春の花吟行 藤原千代子 74

同人会便り 同人会会長に就任して 柳澤 宗正 75

珈琲タイム^⑰ 75

「万象」中央句会報(三月)「万象」同人句会報(三月) 76

万象基金のご報告 77

東西南北 78

水ぬるむ

大坪

景章

(名譽主宰)

同室の人の携帯で桜を見る

満開の桜に見惚るこの年も

しろすぎる今年の花の気弱かな

砲兵の歌に手拍子夕桜

水ぬるむお向ひさんの親切さ

永き日のゼリーは喉をなめらかに

看護士の爪きりくれし若葉風

松の花

内海

良

(主筆) 太

古文書の祝儀の次第松の花
花屑をつけ丸善に立読みす
五六戸に充たざる峡の大桜
利根堤草萌の色定まりぬ
白粥の梅干にじむ朝ざくら
ペンキ塗る屋根の男に黄沙降る
喪服着て湘南の春まぶしめり

三澤いづ子さん逝く

風音集

大伴家持の歌「わが宿のいささ群竹吹く風の音のかそけきの夕かも」巻十九・四二九一から「風」と「音」を選び「風音集」としました。「ふういん」とお読み下さい。



別れ霜

小林愛子

(副主宰)

新築にガラスの入りて雪催

二月尽白布で墓を拭ひつつ

本棚に紛るる悪書春一番

食ひ足りし猫かげろふに消えゆけり

おおかみの兜太は在らず別れ霜

朧夜の仮名書き華ともみみずとも

春の蚊

飛高隆夫

(万象作品選者)

二月尽爆弾低気圧も来て
雛の夜の満月少し色づきて
黄花一花咲き初めてより春一氣
新聞に友の訃報や朝ざくら
ことさらに湯ヶ島の湯の山桜
読みをれば春蚊まつはるやはらかに

木の芽晴れ

江見悦子

(編集人)

水甕の空ひとひらの緋梅かな
手かざすやたちまち散れる目高の子
緑蔭に北ベトナムの機関砲
越南の青田に沈む葉笠かな
竜天に夜のハノイの湖五彩
木の芽晴れ革の匂ひの花川戸

蜷の道

柳澤宗正

(同人会会長)

表札は故人のままや冴返る
五軒目の店頭にあり落のたう
室の芋掘り出してゐる雨水かな
樺樹皮剥落止まず兜太逝く
筆の花そぼ降る雨に震へをり
ゆく水のゆるゆる透けて蜷の道

雲雀が原

原田しずえ

(顧問)

兜太逝く悼む帯戸の奥の春の闇
わが墓となる石にくる春の鵲
蔵町のそら高々と鳥帰る
鯉の息沫あわとなりたる獺祭
春禽や山の子のみな丸坊主
母あらば雲雀が原へ連れ出さん

菜の花

山田 春生

(顧問)

三輪山に夕日かくるる雨水かな
竜天に昇り兜太も逝きにけり
三月や太き日矢さす甲斐の国
菜の花の畦つたひゆく母の家
田上さき子さんとは久しぶりなり
なつかしき声の電話や日の永き
老いてなほいのちとたのむ花見酒

春の潮

福島 せいぎ

(顧問)

漣痕の裾ひたひたと春の潮
轉りの中の朝鮮女墓
梅咲いて浜にまんばう揚がるころ
写経会の大皿に盛る花菜漬
鷹鳩と化して葬送の空を舞ふ
閨鶏のあとの酒盛り火を囲む

鳩の浮巢

内藤 恵子

(顧問)

雛らしき鳩の浮巢に動くもの
咲きながら紅梅赤き瑞枝立て
うけら焚く煙流るる薄紅梅
雛まつり嵐のあとのよき日和
小蟻ひとつつれて戻りし花見かな
さきがけて野蒜の育つ雨のあと

「万象」新人賞速報

第十六回「万象」新人賞(平成二十九年年度)が
次の二名に決まりました。

南 雲 秀 子(所沢)

大久保 進(川崎)

万象俳句会

浅草界限から三筋町界限まで

内 海 良 太

第15回「万象」同人会総会が、4月2日、東京浅草の台東区民会館で開かれた。

今年は役員の改選の年にあたり、福島せいぎ会長と内藤恵子幹事長のお二人が交代することとなった。長年同人会の発展と運営にご尽力いただいたことを心より御礼申し上げると共に、新しく同人会会長になられた柳澤宗正体制の皆さんには、これまでと同様「万象」へのご支援をよろしくお願い申し上げたい。(詳細な記事は34ページ)

桜はやや盛りを過ぎていたが、浅草寺境内は朝から相変わらずの人出だった。吟行の時間はほとんど無かったが、それでも浅草寺界限には江戸時代からの聖天町だの花川戸だの馬道通りだのと名を見ただけで作句意欲がかきたてられた。

聖 天 の 壇 に 積 み 上 ぐ 春 大 根 広瀬俊雄

木 の 芽 晴 れ 革 の 匂 ひ の 花 川 戸 江見悦子

大根炊きで有名な待乳山聖天には奉納の春大根が山と積まれていたし、問屋のひしめく花川戸では朝早くから靴やハンドバッグの革製品の店があいていた。

全ての行事が終わってもまだ春の日が残っていたので、有志の皆さんは浅草界限の思い思いのところへ急いだ。私は浅草寺境内の瓜生岩子像を拝して帰ることにした。丸く座ったおばあさんの像に最敬礼する変なオジサンを周りの人たちは不思議そうに見ていた。瓜生岩子は生涯を慈善事業に捧げた人、日本のナイチンゲールとも称され、NHK TVの「八重の桜」の同郷の新島八重に大きな影響を与えた人だった。

薄暗くなってきたが浅草三筋町界限まで足を伸ばした。斎藤茂吉のあの自伝的随想「三筋町界限」のところで、三筋町保育園に建つ茂吉の歌碑へ浅草の三筋町なるおもひでもうたかたの如や光の如やを見た。ここは茂吉の義父斎藤紀一の病院があったところで、上山から上京した茂吉が四、五年住んだところでもある。

静岡の曽根満さんは言問橋を渡って、墨堤の富田木歩の故地を訪れた。

同人作品

内海良太選

○は佳句に選ばれました。



札幌 松原智津子

多喜二の忌身に覚えなき膝の痣
八十路半ば終の想ひの雛飾る
蔵座敷雛に向ひて蕎麦啜る
アネモネや睫毛の長き子の寝顔
春兆す空は蒼より水浅葱

札幌 岡本敬子

旗立てて雑兵ばかり雪合戦
はやぶさの狩の跡なる羽根散らばる
厚綴ぢのひさしの戯曲春の雷
手毬麩の色の明るき名ごり雪
海満つるなしてふ箴言雪解川

札幌 濱谷和代

ボルシチのビーツの赤さ冴え返る
春寒しビスクドールの褪せしチュチュ
水音は六花を解く雫かな
落日の薄くれなるの余寒かな
軒下を穿つ氷柱の七光り

札幌 大内和憲

春潮に洗はる砂鉄をちここに

齧^う齒削るドリルに火花春の雷
地の力踵に溜めて耕せり
屯田兵の欠けし湯呑や凍返る
法華經の写經に力春隣

札幌 紅 露 恵 子

人形の白き面輪に春の色
啓蟄や光は雪を突きぬけて
はじまりはひらひらひらり春の雪
風止むに春の怒濤の何処より
集まりし馬の鼻先草萌ゆる

札幌 玉 田 瑞 穂

馬柵の径行き惑はせる雪解霽
落ち羽根の流れてゆくや雪解川
遠雪崩それきり聞かず夜に入る
風荒ぶ枯山越しに海光る
利尻富士島磐石の迄てのなか

札幌 大内 マ キ 子

雪吊の解かれし木々の素直なり
残雪や樹間に錆びし兎罌
握手の手少し濡れをり卒業子

木々移る鳥春光をはじきたり
早春の日の束となり雀翔ぶ

江別 佐 藤

哲

野ざらしの機関車冬の匂ひして
いくさ無き日本の空山ねむる
サハリンの氷を分かつ碎氷船
鍊群来浜は白子でにぎりけり
庭の木々我慢がまんと冴返る

苫小牧 林

陽 子

さみどりに雪より生れし落のたう
今日こそは仕舞の雪と言ひて搔く
剪定の女小まめに大胆に
それぞれに湖引きずりて帰る雁
やはらかき風の行く先榛の花

苫小牧

落 合 裕 子

二月尽郵便受けに三月号
真向いて眼の痛し春吹雪
小糠雨木蔭にあかき鶯の喉
雪代のさざ波光りては流る
松葉縫ふ声も小さき松笔鳥

苦小牧

榎

美幸

美容室の鏡に白寿春うらら
海青し白き帯なし鍊群来
波静か浜へ一筋鍊群来
雪解けの土の匂ひや石狩野
百疊の隅呀返る地獄絵図

湯沢

小松

敏郎

枯杉葉種火に櫓の燃え上る
雪崩来て一瞬止る谷の水
萱屋根に煤の匂ひす大氷柱
手負雉子尾羽落して翔ゆけり
残る雪孕み兎の尿の跡

東根

奥山テル子

黄蓮のはや星型の實をかかげ
夫許せ冬至南瓜も煮ずに臥し
寒より臥す母は涙で礼申す
よがんすのう丙甲堂の雛案内
○また白くなりし月山花の上

上山

森

和子

○野火消して野火の匂ひの父帰る

浅春の父の癖字の忘備録
棄て田みな原野にかへり雪の果
残る雪千の鳥居の千の闇
かたかごの群れ咲く処このあたり

新潟

佐藤

三男

梅咲くや妻の遺影を庭に向け
路のたう三つを摘んでこれでよし
湯上りの椅子深々と梅の花
老幹の枝若くして梅咲けり
雪の底農機具叩く鍛冶の音

新潟

佐藤

雄二

村史五巻読みつぐ日々や冬深む
文庫本束ねて棄つる二月尽
書き写す龍太百句や春炬燵
厚く切る故郷の塩引故郷の酒
六斎てふ二、七の市や雪解水

新潟

高橋

ひろ

荒東風や杉の木怒号して止まず
啓蟄や持ち上げて見る草の下
如月や溶けてしまひし夜明雲

夫婦とも好きな苦味や水灌菜
海境を色濃くしたり春の佐渡

新潟 川村 みよき

建替への足場たたむや花ミモザ
兜太さん逝かれ父の忌多喜二の忌
春霞しばし笹の葉さんざめき
音たてて道を流るる雪解水
旧道の手掘り隧道幣辛夷

南魚沼 森 山 暁 湖

加佐の笠押 二句

押し押して声を囁らせり堂押祭
夕晴の堂押祭となりにけり
腕ほどの氷柱鬼門の軒にかな
深雪晴八海山は神の山
塩沢や牧之通りは雁木町

宇都宮 阿久津 勝利

ねえさんのやうな教師や新学期
一合を炊きて妻待つおぼろ月
週二日船で女医来る島うらら
たてがみも尾もつややかに牧うらら
渡月橋潜る水音春めけり

芳賀 大村 かし子

強東風や蛇口の水の横つ飛び
梅の寺軒に置かるる車椅子
白梅や方一間の地藏堂
御供へのだんごを蒸す間春の雪
リハビリや自転車籠に花菜摘む

芳賀 見目 トキ子

囀やひと鍬に畑土落す
春嵐土巻き上がる整地跡
安らかな合格の子の寝息かな
語部や少し派手目の春裕
親子してせせらぎへ足ねこ柳

佐野 亀田 やす子

春の鴟室の八嶋の寂けさよ
面暗き親鸞像に雀の子
廃校の跡の石碑や花なづな
蛇穴を出で薄雲のひろがれり
ビーズのやうな小松菜の種蒔きにけり

佐野 増田 幸子

残雪に夕日かがよふ雲巖寺

八溝晴熊笹美しき雪解かな
手乗り雀の軽きを遊ぶ雛の日
街なかまで蘆焼きの灰降りきしや
蘆焼きの黒き灰浮く夕の川

佐野 駒形祐右子

木目浮く花袋旧居の縁ぬくし
梅寒し城沼に向く藩主の居
せせらぎの落ち合ふところ露の蓋
尊徳の赴任の里や麦青む
野焼あと灰巻きあぐるつむじ風

佐野 加藤季代

山門を入れれば風止む牡丹の芽
青空を押し上げてゐる花辛夷
一つまた密かな音や落椿
春ほこり一刀彫の鑿の跡
春の月尾根はなれむとして揺らぐ

佐野 鍋島広子

金縷梅や通り抜けたる社道
白鳥の声のくぐもる撒き餌かな
白鳥の一斉に翔つ羽音かな

遊水池の底を晒せり春の風
鼠ねらふ沢鷺の一羽春一番

佐野 阿部

澄

梅東風や沼見はるかす尾曳橋
齒科院の小さきコップや桃の花
講の朝春のストープあかあかと
馬鈴薯を植うるや夕雨となる
葦焼の煙へ鴉鳴きゆけり

佐野 芝宮留美子

灰色に沈む沼面や椿東風
啼きながら群れ翔つ川鶉春の沼
緋色の芽ほぐるる牡丹花袋の碑
山茱萸のけふりて風を染めにけり
パステル色を日向に置きぬクロッカス

足利 大木

茂

女教師のつひに涙目卒業式
耳遠き爺が札売る彼岸寺
○杉の花十戸の谷戸を烟らせり
女衆は風上に逃げ堤焼く
山茱萸や跡取り絶ゆる長屋門

犬ふぐり寺領に石の三角点

さいたま 手島 南天

碓氷川 涸れて人魚の如の岩

長屋門長塚節の家くぐるや茅屋梅真白

秩父嶺「海程」発刊に誘はるに狼のこゑ兜太逝く

高みつつ鳶の輪舞す龍太の忌

石路の絮飛ぶやフクシマ八回忌

さいたま 山本 右近

ささくれの波真つ向に蘆の角

白波へあたま揃へて干す目刺

戸袋の中鳴つてをり春一番

水底の魚影に斑春の川

○比叡より比良へ春雷ふみわたる

さざ波は春のうたごゑ竹生島

志木 中村 千久

○我が影に入りてまた出で初蝶来

ぼんやりと行くあてもなし春の雲

染まるもの桃色に染め春夕焼

白妙の春満月ののぼりゆく

病む妻の鎖骨の窪の雛あられ

けぶり立つ川ひと筋や雪の果

所沢 三好 かほる

○風神の大きな袋春障子

南禅寺垣うしろに紅き椿かな

み仏に並べて雛段飾りかな

朝粥の碗に刻みし花菜漬

こも巻の稲藁みだれ春嵐

春シヨール巻いて二の丸めぐりけり

所沢 水野 加代

万華鏡まはして春を待つことも

紅梅や迷へば右に曲がる癖

鶴一羽春の水面を掻きまはす

碑に和魂漢才梅真白

神鶏の尾羽引き摺る梅の花

○懐かしき田の字の間取り雛祭

所沢 森岡 恵子

啓蟄の畑やはらかに掘り起こす

白樺の木立の黙や浅き春

近づけば芽ばり柳のゆれ初むる

くろぐろと走り根に瘤草萌ゆる

春耕の声の散らばる山の晴

入間 山口素基

春光や佛に千の手と眼

しばらくは金子兜太の春眠す
瀬戸口清文氏逝去（後撰のおにいさん）
歌ひつつゆつくりとゆけ揚雲雀

春の日や目瞑りをりしつけまつげ
春の雨夜も降りつぐ別れかな

千葉 田中道江

やさぐれて高く潮ふく大浅蜷

春風や喜寿のスカーフ桃色に

山茱萸を活けて佳き日となりにける

明日葉に海鳴りとどく朝かな

花ミモザけむれる道は海へ尽く

酒々井 竹澤竹里

飛石を渡る川風初ざくら

千鳥石跳んで渡りて初桜

春光や波ひとつ無き地震の浜

沈丁花の香り満たせる不動堂

心まで届く香りや沈丁花

佐倉 内海保子

涅槃図の裾に涙の滲みたる

草餅にどれも指跡蔵の町

灯台の光の届くキャベツ畑

地図広げ梅の名所の村に入る

梅咲いて沓脱ぎ石の込み合へる

佐倉 大内佐奈枝

苗札はカタカナばかり遊園地

若冲の涅槃図野菜づくしなる

残る鴨杭を回りにるばかり

山茱萸を活けて墓参を思ひ立ち

古塔婆焚きし煙の彼岸前

佐倉 三屋英俊

極楽の調べやはらか春の夢

春光を引いておはじき擦れ違ふ

啓蟄や古衣を這ふ針と糸

どうしても解けぬ知恵の輪鳥雲に

赤兜折る惜春の大石忌

四街道 奥 太雅

つつんと末黒に茎の焼け残り

苗植ゑし学有林の杉の花
剪定の枝にいらがの繭堅し
春満月夕戸朝戸に愛でにけり
○緩やかにこんがらがるや蛸蛸の紐
花はこべ素焼の鉢をあふれけり

船橋 大坪 貞子

陶工の淋しき墓や李咲く
○蓮如忌の梅干し一つ尊かり
夫を待つゆつくり朝の蜺汁
家のこと雑になりがち春一番
沼道の人に近づく帰る雁
桃の花卓の生死の本を見る

船橋 山下 良江

わが庭の瘦せんぼ土筆励ませり
皺しわの母の指先千鰭裂く
うぐひすや御堂支ふる丸太ん棒
春泥を踏みて小鹿の近寄り来
○遠くより舟洗ふ音水温む

船橋 大山 春江

遠退いてより芽柳の青深む

蟻出て先づ真つ新たな切株に
地芝居のありし境内鼓草
ドラム缶囲む漁師の春焚火
青すぎる空に辛夷の眩しさよ

船橋 赤堀 洋子

淡雪に滲み速達届きけり
畦焼に始まる支度学校田
干し竿に漁師の合羽椿垣
落椿流れに揺れて流されず
薄氷へ蒲の穂絮の崩れたる

船橋 久保村 淑子

追悼の大鐘を撞くミモザ冷え
下萌の脈打つ大地ひろごれる
風に揺る淡き鶏色土佐水木
子白鳥とり残さるる沼広し
枯葉敷く中より鳶の芽立ちかな

船橋 大坪 あきら

うぐひすの鳴くも鳴かぬも静かなり
花桃の蕊もあらはに散りにけり
空ふかく夕日ひとすぢ竹の秋

こちよき崖に一つの花重
砲兵を口ずさむ父桜どき

船橋 片桐 帆 一

春寒しおやきの熱き灰払ふ
欠航を告ぐる空港春の雷
石の白お玉杓子の水たたへ
白木蓮雨の来さうな坂の道
牛蒡削ぐ春分の日のみぞれかな

柏 山本とく江

春雷や枝にふくるる尉鷗
古利根の閉づる水門梅真白
朝な夕な散る紅梅の老ゆること
鷹鳩と化すや里山匂ひ立つ
料峭や猿全身で威嚇せり

柏 松原三枝子

十年経し臘梅初の一花かな
兜太逝き欣一想ふ春炬燵
軒間に春満月のぬつとかな
春の星数ふるゆとり回復す
○卒業や昼月かかぐ時計塔

柏 内田 郁代

料峭や里にも火山灰の降るといふ
鷹鳩と化すや夕闇湿りがち
癒えし子に淡き桃色春シヨール
お遍路や一粒丸を買ひもして
パンジーや日時計はいま十一時

柏 古川 京子

はだれ雪墓標のごとく武甲山
蔵窓を御殿に仕立てお雛さま
街路樹の古巢吹かるる屋敷町
塀高きお屋敷ばかり若緑
大谷石の屋根の威厳や白木蓮

流山 沢辺たけし

仁清の色絵香盒春立てり

○檻揺らす猿に二月の日の硬し

春の水笥の破れを迸る
白梅を濁りに映す神田川
雉子の声筑波の嶺に吸はれけり

流山 穂 莉 照子

白梅や近づくほどに老木に

蘆牙やゆるりと鯉は泥をひき
花辛夷ひとつひとつに空ゆるむ
初花を待つや孔雀は羽ひろげ
巢作りのペンギン枝を取り合へり

浦安 田 中 幹 也

若草や雨の匂ひの残る朝
大らかに曲る野川や涅槃西風
囀やしんと暮れゆく三番瀬
菜の花や声のみなぎる海女の小屋
春暁の翔つ鳥ひとつ兜太逝く

東京 谷 田 部 栄

行商の荷に房総の花菜漬
接岸の舟ひとゆらぎ芦の角
歛喜仏はお厨子の中に桃の花
○天狗党争乱の山風揚がる
盗み飲む昼酒の酔ひ大石忌
秩父嶺の狼吠えよ兜太逝く

東京 須 賀 允 子

中川の水きは蘆の芽つんと
橋うらの水かげろふやうらけし

涅槃西風土あたらしきもぐら穴
多摩川にひろがる野火の煙かな
ふるさとは遠くになりぬ鰯東風

東京 降 幡 加 代 子

城ヶ島水仙の碑や水仙咲く
繻の木の下に出で来し露の蓋
霜柱清正の井へ坂下る
池の辺に石楠花の花枯れ極む
土佐水木ほころぶ朝雨上る

東京 名 和 政 代

風光る末社に残る和算額
式台に享保の雛並べ立つ
春眠や夢のなかにて夢を見る
地虫出で伐採の屑匂ひたる
盛り場の裏に廻れば葱坊主

東京 山 本 絢 子

主なき庭に見付けし露の蓋
四谷土手いつもの所つくしんぼ
花の中弥撒の鐘鳴る子の忌日
春落葉踏みて尋ぬる綾子句碑

尾山神社

乙女椿飾る座敷や治部煮食ふ

東京 藤田裕子

赤ん坊の寝顔菩薩や桃の花

春の小川越えて村の名変はりけり

露味嚙を籠めて小ぶりの白むすび

突堤の彼方に消えぬ難の舟

遅春の秩父に兜太逝きにけり

東京 赤松郁代

山晴れや雪解水鳴る雪の中

○芽柳の風のもつれを風の解く

爪先の草履のしめり麦を踏む

雨のあと薔薇の芽と棘競ひ合ふ

桃の花一枝足して誕生日

東京 島野ひさ

風なくて桜ひらひら御殿坂

春風やからくり時計の人形町

彫塑館本日休館さくら散る

初桜霞が浦の英霊に

三浦いづ子さん逝く
訃の知らせ届く朝のなごり雪

東京 佐藤晴子

三桎の花影窓に彫塑館

クロッカス彫塑の猫の赤茶けし

梅の香のただよふ古き庭祠

ぼんぼりの明かりやはらか内裏雛

神苑に綾子句碑在り梅香る

東京 加賀葉子

春寒やソックスの親指に穴

春塵や拭かれ減りたる旧家の棧

カヌーゆく春の水面に声残し

からたちの芽吹きやはらな堤かな

拾ひ来し天神の梅双葉生ふ

東京 久留島規子

春浅し横須賀港に浚渫船

清掃工場のホール華やぐ吊し雛

金縷梅や園丁なべて寡黙なる

沈丁の雨あたたかき喪の帰り

美しき人花を見て逝きたまふ

東京 中村弘

白梅や巫女より受くる岩田帯

あたたかや水天宮に授乳室
厚焼の玉子程よく春の色
釣あぐる糸に重さや桜魚
残照に映え沈丁の臙脂濃し

小平 吉村 光子

病癒えよ紅梅の花咲き満ちつ
春筍のごとく伸びよと孫に文
黄水仙ギリシヤ神話を読み返す
花終へしシクラメンをまだ窓の辺に
枯牡丹春日をあびて生き返り

立川 正田 華子

春かすみ櫓の奥に目の薬師
道灌の山吹芽ぶく大手門
ものの芽にしかと産毛のからみをり
乗込みのあぶく大きく吐きにけり
永き日の2B鉛筆削りける

町田 吉中 愛子

土掘つて土埋めもどす雨水かな
豪快に兜太の逝けり春の雷
○人滅つて道新しき名草の芽

経文の白波志功の春の海
風光る菱形の目のマリアさま
天井へ届く古書籍北開く

町田 広瀬 俊雄

臙なる海の彼方の天城山
川岸にキャック並べ獺祭
ドアノブに揺るるリースの紙雛
音高く鯉の跳ぬるや芦の角
うららかや志功の女ふんはりと

青梅 小林 珠江

雪雫やみたる夜は星匂ふ
藁葺の少し瘦せたり春時雨
百年の樹齡ひろげし枝垂梅
三桎の花の色浮く夕明り
道具屋の戸口にでんと君子蘭

横浜 仲山 秋岳

行く春や笛吹く人が橋の上
単線の終着駅や春の浜
図書館に親子の会話あたたかし
図書館に居眠る人や春彼岸

こもり居る友も老いたり竹落葉

横浜 榎 本文代

にぎりなき空の青さや梅の花
白き皿棚に重ねて冴返る
春愁や開きしままなる小抽斗
初音かな雨雲残る裏山に
三瀬いづ子さん逝く
逝き給ふ雨に桜の咲き初むを

横浜 浅 井 敦 子

雪解や山の御坊に嫁の来て
仁王尊の肋のほこり春隣
横挿しの針に夕日や針供養
洩垂れのチンパンジーや山笑ふ
中華菓子のくれなるこぼる四温かな

横浜 西 本 才 子

野遊びの竹の皮よりにぎり飯
芽ばり柳吹かるるままだに文殊堂
ゲート座の道へだてたり葎の花
ベイブリッジ巨船のくぐり暮遅し
○マラカスを振つて唄ふよ雛まつり

横浜 川 越 昭 子

会果てし百人町に小雪舞ふ
目借時つけっぱなしのラジオ鳴る
玄関のドア新しく春隣
おもひのまゝてふ天神様の梅
春の雲厚き朝なり震災忌

横浜 久 松 和 子

雨音の春の爰となりにつけり
寒もどり薬はのどにひつかかり
花蛇を素手に捕ふる農婦かな
手の甲の骨冷たかり二月尽
春寒し紺紺羽織る兜太逝く

横浜 寺 沢 千 都 子

断崖打つ二月の怒濤兜太逝く
畦道に万葉歌碑やつくしんぼ
つくし野や大和三山鶴の中
まんさくや罇幾筋も登り窯
鉢の花みな盛り上がりあたたかし

横浜 大 橋 雅 子

落味噲とオンザロックや誕生日

大黒天の部屋一杯やつるし雛
啓蟄や松の湿りの菰外す
芋観音の赤き幟やご開帳
春の雪姉三瀬いづさん氣遣ひし妹であり

横浜 福田 雅子

木々芽ぐむそれぞれ競ひあふやうに
若き日のヘッセ耽読春嵐
草餅を買ひ足弾む坂の道
教へ子と会ふ約束や春岬
春寒しなつかしき人逝きにけり

横浜 山崎 郁子

亡き妹の涙と言へるなごり雪
雪の傘たたみ通夜の始まれり
喪の女と語らふ窓の春吹雪
春の花棺に溢る別れかな
浄瑠璃の流るる木立春祭

横浜 田賀 煤恵

白梅や旧仮名文字の案内板
表札の太き墨字や春の雨
亡き夫を想ふこの香や沈丁香

裏門の鍵開け放つ日永かな
枝しなふ木五倍子の花のうすみどり

川崎 山口 千代子

兩岸の桜見てゐる小橋かな
初蝶よと教へてすぐに見失ふ
うららかな音の静かな水車小屋
○げんげ田に落ち行く大きな夕日かな
寒暖の厳しき春や水の音

川崎 新妻 奎子

梅林の風は気まぐれひとりごつ
師の庭の灯籠一基春北風
踏青やふくよかな胸突き出して
訪ひ来れば河豚供養の日と貼り紙の
一瞬を切り取りて飛ぶつばくらめ

鎌倉 恒川 清爾

寒明や妻エナメルの靴を履き
音もなく喰はれし月の暖かき
遠足の大きおにぎり母遠き
蠶や三・一・一の海静か
生しらす海の真砂に数多の目

逗子 卯辰美苗

売地いま小指の丈の土筆かな
病室や掌に掌を重ね夕永し
百歳まで母生くるとや山笑ふ
啖呵切る夢を見しより寒戻る
母の家近づきてより春の虹

横須賀 武井美代子

梅東風や淡島さまの神事待つ
寄り添うて男雛女雛の流れゆく
梅の散る庭の沓脱ぎより上る
日の当る方へ傾き若布刈舟
鳶がもの啜へて去りぬうららかに

横須賀 織田みさゑ

初掘の筍土間を濡らしけり
春の海音なく暮るる浮標の数
春眠や夢の中では健常者
露味噌や母の十八番の香を放つ
少しづつ行列縮む針納

茅ヶ崎 三澤治子

腰骨にずしりと春の引越かな

高齢者許りの郷や雪やなぎ
転院の妹を見舞ふ彼岸入り
母たきの写真を飾る春彼岸
○ 露のたう小さき小さき花開く
初桜妹を見舞ふ道すがら

伊勢原 佐藤和子

腰越の小さき浜辺若布干す
はんの木の花散る水辺稚魚走る
辛夷咲き人の減りゆくふるさとよ
島影のうすむらさきや春の海
春暁や真白き月が山際に

松本 中條今日子

悠々と空を渡れる春満月
駈け上るごとき朝日や春告ぐる
雑巾を縫ふも我が家の針供養
九十を越えし女将や山笑ふ
紅の夕焼雲や凍返る

静岡 大村峰子

春北斗ダム湖へ柄杓傾くる
鯉打つや応ふるやうに地虫出づ

わめき合ひぶつかり合うて雪解川
牡丹雪その大ききの氣儘なる
犬に声荒らげし後の菊根分

静岡 曾根

満

虎落笛湖の波音攫ひたる
涸川の色を問ふれば白と言ふ
稜線の二重となりぬ寒戻り
雪代の川に尽きたり獣径
風青く芽吹く唐松ゆつさゆさ

静岡 藤原千代子

ものの芽や梯子の掛かる子らの基地
切株に座る三人麦青む
きんつばの歪に焼くる日永かな
梅が香や主の磨く玻璃障子
大釜に湯をたぎらせて桜守

静岡 海野みち子

鐘楼へ苔の青むや今日雨水
○春の雨尊徳像の薪濡らす
水温む漁解禁の幟立つ
啓蟄や防空壕へ諸出しに

啓蟄や眼を覗かれて眩しかる

静岡 宮崎知恵美

野仏へ三極の花影落す
立春の菜を詰め仕上ぐ手弁当
雪乗せてバスの来れり呉服町
冬青空芥の寄する港かな
啓蟄や如露の中の蜘蛛動く

静岡 宮崎みゆき

桜守池の芥を覗き込む
わやわやと露の蓋買ふ列に付く
米蔵の煉瓦に疎ら春夕焼
裏山の静けさ極む初音かな
春寒や牝馬いやいやしてをりぬ

静岡 荻野加壽子

春菊の花春菊の匂ひかな
ものの芽やひそかに風と交信す
竹林の竹の騒めき涅槃の日
まどろみの肩よりすべる春シヨール
古巢落つとぎれとぎれの波の音

静岡 長島 操

母の忌や心経唱ふ春隣
掌に命伝はる寒卵
前山や光となりて雪の飛ぶ
新聞に眼鏡置きある四温かな
魚屋の棚に鰯と福の豆

静岡 小川 明 美

朝焚火槽の割れ目に煙立つ
冬青草登呂田の畔を縁取りぬ
冬の陽を集めて象の動かざる
立春やキリン身長計らるる
春昼や目を閉ぢ犀の耳動く

静岡 藤本 節 子

懐に影を納めて枝垂れ梅
トラクターの車輪に粘る春の土
啓蟄や水掻き回す鷺の脚
春風やほかほか湯気の象の糞
銅鑼の音や港の丘の春シヨール

静岡 大長 文 昭

啓蟄や守一の蟻動き出す

丁子屋の葺替へいよよ始まれり
神主の幣の風浴ぶ受験生
三の丸またぎ二重の春の虹
水音へ木五倍子の花の揺れやまず

静岡 加山 ひさ子

風光るホームひとつの駅に降り
卵白のやうな春月出でしかな
陽の当たる特等席や露の婆
行くほどに足裏にやさし春の土
揚げたてのカサゴを喰らひ春深し

富士 神田 美穂 子

己が影踏み踏み梅を探りけり
蒸し牡蠣のうましとワイン進みけり
居坐れる立春寒波といふ寒波
剪定や空どんどんと拡がり来
山笑ふ富士やはらかく裾を延べ

みよし 山内 なつみ

石佛の首に値札や花の雨
桜並木くぐりて行けり引越荷
芋羊羹の厚切り春の午後三時

病ひ得て胸のときどき春愁
鶯や髭びんと張り鷗外像

富山 若島 久清

鳴く山羊の声もやつれて戻り寒
片手間の農続けむと縄をなふ
料峭に剃り立ての顔ひきしまる
春灯し夜通しかかる牛の産
取り上ぐる仔牛湯気あぐ浅き春

射水 成瀬 真紀子

折れ枝の花芽つやつや横たはる
梅ふふむ遠目に紅と分かるほど
雨樋を鈴の音たてて雪解水
太陽を凌ぐや峰々の残雪光
白髪に春日や母の誕生日

金沢 岸川 素粒子

遼巡の年歩まする除夜の鐘
正宗に多き無銘や寒の月
残り福買うて都の雨にあふ
冬芽立つ淀の堤や蕪村の忌
○木簡に出拳の記録春近し

デイケアに馴染み来し妻日脚伸ぶ

金沢 田村 愛子

春吹雪戸口埋もるままの家
蠟梅の落花掃き寄せ人迎ふ
白山の夕映え帰雁の列正す
芽柳の吹かるる河岸ホルン吹く
鳥帰るロダンの像をはるか見て

金沢 新保 ふじ子

通学路下見の親子風薫る
渡り初め川面をすつて夏燕
人力車夫銅色の日焼けかな
米屋には米屋のにほひ小六月
田終ひの煙ゆつくり村包む

金沢 井村 和子

法堂の屋根に一刷き涅槃雪
まんさくや長命水吐く石の亀
雛納め不意に鳴り出すオルゴール
淡雪や相寄る尉と姥の石
大津波襲ひし大地草萌ゆる

金沢 中 條 睦 子

○春一番過ぎたり山に星ふやし
藻にからむ魚の卵塊水温む
猿走る一揆の里は木の芽時
星青くまたたき遙かお水取
俱利伽羅の谷深きより雪解露
雛月や袱紗にのせて貝香合

金沢 今 越 み ち 子

木の芽雨庭師総出に苔植うる
満開の梅や佳き日と口口に
曲水に木橋土橋や水草の芽
力込め金鼓ゆするや合格子
白梅や岩に線彫り牛の顔

金沢 伊 川 玉 子

一竿の若布干さるる蟹の背戸
電線に雀ひしめく鳥帰る
鳶の笛一人ひたすら畑を打つ
涅槃会のお斎大盛り黄粉飯
紛れなき去年の燕農機小屋

金沢 伊 藤 美 音 子

春めくや昇りくる日に力あり
団栗の芽吹かんとして耶蘇の谷
水温む砂巻きあげて魚の群
一抱へほど雪残し氷室跡
○穴出でし蜥蜴日の石つかみけり

金沢 高 田 た み 子

春の夜やワイングラスは九谷焼
あぢさゐの芽吹き初めたり一笑塚
実の残る白山吹の芽吹きたり
豪姫の祈りの像や余寒なほ
連山を隠してしまふ春時雨

金沢 佐 野 和 子

小物屋に勧められたり春火鉢
薔薇はもう芽吹きてゐたり母忌日
高山や稚魚の犇く雪解川
利家を祠りて彼岸団子撒く
雪囲ひ解く白山を目交ひに

金沢 後 藤 桂 子

涅槃西風土塊なじむ歟の先

荒鋤の土の湯氣立つ春残し
馬の仔や土竜のあげし土嗅ぎぬ
春めくや加賀麩の五彩塗椀に
蒼穹へ光芒放つ花辛夷

金沢 豊田 高子

神の池日の斑を解く蝌蚪の陣
光陰の和紙の手触り難包む
髪結ひへ芸妓連れ立つ春シヨール
○暁光の反戦句碑へ雉子啼けり
句鳥刻み鳴きして古墳山

金沢 松井 佐枝子

泥濘を来て梅林の梅芽吹く
糊うつぎ寂花のこし芽吹きをり
涅槃図の我が干支小さき鼠かな
殉教の谷うぐひすの鳴く頃か
憶えなき妣を想へる彼岸かな

内灘 塩井 志津

寒戻り流れ着きたる木の破船
根こそぎの一樹中洲に雪解川
啓蟄や鄙も都も道普請

大正の米騒動あと地虫出づ
湖北なる霞の奥の隠れ里

七尾 谷 渡末 枝

塗師木地師塀をひとつに春の闇
啓蟄の棚田に風のにほひかな
能登島をつなぐ朧の橋二つ
原発の建設予定地かげろへる
春雷に巻き戻りする糸車
○縦糸のほつれ蛙の目借時

敦賀 石田 野武 男

御殿雖大きく飾り城の町
原木へ斧の一撃風ひかる
○比丘尼寺つばめに大き巢をゆるす
孕み鹿翡翠のいろの水を飲む
ますほ貝拾ふ渚の涅槃西風

敦賀 山本 麓 潮

荒東風や安寿の浜の磯馴松
芋粥の説話を今に春炉焚く
ハングルの難破漁舟や春寒し
行く雁や空を曳きゆく一文字

彼岸会や兵戈無用と僧の説く

敦賀 山本 みゆき

冴返る江戸の匠の豆鮑
料峭や磯の藻屑を焚くけむり
黄水仙誰が植ゑしか水夫の墓
塗師の里鶯高く舞ふ春田かな
潮仙在す礁や燕来る

敦賀 倉谷 紫龍

吹雪く夜や晴れ着まとひて黄泉の旅
農はじめ足の三里へ二日灸
田楽能大きく舞ひて春浅し
白魚漁漠寡黙に撚網を上ぐ
観音の扉重たし出開帳

敦賀 倉谷 ます美

物干に見上ぐ薄月春まぢか
寒柝の音とびこみて灯を点す
夜伽の灯うるむ虚空や雁帰る
丹精の盆梅見ずに母逝けり
鶯のこゑ白骨の母を追ふ

敦賀 靄田 勝子

川に豆打ちし晴着の厄女
春シヨール紺屋に買へる縹色
孕み牛涙目に食む雪間草
酒蔵のつづく川筋柳の芽
酒造り唄の聞こゆる雪間草

徳島 福島 吉美

流木を除けて畑打ち始めけり
春寒や魔除け貝吊る冠木門
藍色の湯呑みに浸す花の種
桜鯛予約して買ふ誕生日
○一夜飼ふ浅蜊舌出し遊びるし
鹿除けの土塀に咲きし冬菫

徳島 村上 和義

辛夷咲く窓辺明るし童歌
卒業歌うたふ十人漁師の子
三日目に貼り薬買ふ徒遍路
菜の花や巡礼の道明るくす
花を見に一人漕ぎゆく車椅子

室戸 安岡 みさき

春光の海のまあるく室戸岬
鮑海女喜寿の乳房をおほらかに
寺よりも灯台低し落椿
貝寄風や海女の葬列磯伝ひ
遍路宿太平洋へ窓を開け

那覇 伊舎堂根自子

すれちがふトラック甘蔗を満載す
春光の与論島近し辺戸岬
みやらび句碑与論の島は東風のなか
復帰の碑蝶からみとび海原へ
「風」ありし頃懐かしき春の日矢

那覇 前田 貴美子

良太句
うりずんを待たなみやらび句碑訪はな
剪定の空を大きく福木路地
○囀や男拒絶の御嶽口
負山羊は食ふと戯言よなぐもり暈晦
壳値札首にゆらゆら山羊うらら
野遊びの指を神井にすすぎけり

那覇 大 湾 宗 弘

大爪の奥にがうなの目が覗く
幻の蝶のさみどり御嶽閣
真昼の夢か青海を蝶渡る
○海風へかざす阿檀の風ぐるま
春愁や眼鏡に指紋ありありと

那覇 比 嘉 半 升

東風鴉三角山へ五つ六つ
亀鳴くや女学者の濃きルージュ
強東風や勝負のつかぬ山羊合せ
戦意なき山羊に耳打ち春の風
剪定の脚立届かぬ福木かな

那覇 當 間 シ ズ

亀甲墓の胎ふつくらと春落葉
春愁や少年の背に草の屑
風入れて長講を聴く目借時
逝く春を母こまごまと言ひ遣し
鳥雲に妣よ逝きませ寂光土

那覇 中 本 清

しろがねの仔山羊の角や風光る

峡の風九年母の花に来て低し
勝山羊を繋ぎて松の芯立てり
剪定の福木路地ぬけ御嶽まで
海開き猫も阿檀のかよひ路に

石垣島海開き 三月二十一日

宜野湾 呉屋菜々

○沖縄や春意切裂くジェット音
黄砂降る基地の囲ひの内と外
琉球つばめ抗ふ二月風廻り
はぶ穴を出でて轢かれし山原路
万次郎吹かれし浜か雲雀東風
遠浅の水の緑や石蓴篋

宜野湾 いぶすき

幸

イグアナの幹に擬態や春眠し
池の辺の小草にからむ蝌蚪の紐
平御香焚きたる跡や春岬
九年母の花こぼれても薫るなり
龍柱に凭れ人待つ首里の春

西原 宮城

勉

地物買ひねだりしおまけ村のどか
泥抓む招きそびれし潮まねき

恋猫のふぐりの消ゆる藪の闇
春泥の靴跡著し病院壕
子はいつも光と駆けてクローバー

豊見城 渡真利真澄

種甘蔗に風の湧く刻ありにけり
春潮の引かねば行けぬ崖の拝所
春屋の干瀬やジョン・万上陸地
春霖やマングロープの雌木と雄木
対岸に茶毘の煙や春の昼

謹告

奥山テル子氏（「万象」同人）療養中のところ
四月十三日、逝去されました。

享年九十歳。

謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

万象俳句会

同人作品の佳句

内海良太

また白くなりし月山花の上 奥山テル子

時ならぬ春の雪で月山がまた白くなった。つい先日、雪の時はまだ蕾だった桜も今は満開。満開の花の上の白い月山が眩しいほどだ。「また」という言葉に否定的な響きがあるが、花の上の雪の月山の美しさの賛歌となっている。

緩やかにこんがらがらるや蝌蚪の紐 奥 太雅

お玉じゃくしの卵が水の底に横たわっている。うつすらと雪のように見え、どこかがねじれている。「こんがらがらる」という写生的な描写が適切。そういわれてみれば蝌蚪の紐の有り様はいつもこんなふうだ。

懐かしき田の字の間取り雛祭 水野加代

旧家の雛祭に呼ばれて出かけた。襖で仕切られた部屋に通され何か懐かしさを覚えた。都会のマンション暮らしではなかなか味わえない旧家だからこそその空間、襖で四つに仕切られた「田の字」の間取りがいい。作者の生家もそうだった。

檻揺らす猿に二月の日の硬し 沢辺たけし

猿が檻にしがみついてガタガタ揺らしている。なにか面白くないこともあるのだろう。動物園での囁目だが、まだ寒さの厳しい二月の日差しは淡くて硬い。檻の前の作者と猿の

間にも硬いものがある。

人減つて道新しき名草の芽 吉中愛子
今年も春が巡ってきた。長い時間をかけて完成した立派な道だが、この頃は人が減って何かちぐはぐな感じがする。

このちぐはぐ感は滑稽であるけれども、滑稽とは言えない現代の様相を示している。肯定的契機と否定的な契機の取合せの一種のイロニーニッシュ的な対象把握は、俳句の本質的なものだろう。

一夜飼ふ浅蜷舌出し遊びぬし 福島吉美

明日にでも食べられてしまう浅蜷に深い思いを寄せる作者の吉美さんはお寺の奥さん。一句の中に生類憐みの情や仏心の深さが自然と滲みでている。この生物愛と信仰心が「飼ふ」という言葉や「遊びぬし」となっている。

細見綾子の師、松瀬青々には、仏教的な生物愛の逸話が多くある。青々が蜆や浅蜷を買う時には、罪ほろぼしに一碗余計に買い足して逃がしてやったという。

海風へかざす阿檀の風ぐるま 大湾宗弘

海岸の砂地に防潮用として茂っていた阿檀の木を覚えていてる。阿檀の風車というのは子供たちが阿檀の葉で作って遊ぶ簡単な風車なのだろう。海風に向けるとサラサラと音を立ててよく回る。大湾さんは皆に分かりやすいように「風車」といった。沖縄には風車を「かじまや」という美しい言葉がある。本当は「阿檀のかじまや」といいたかったに違いない。

桜花爛漫の浅草で

増田幸子

第十五回「万象」同人会総会開催

第十五回「万象」同人会総会は四月二日（月）東京・浅草の「台東区民会館」に同人六十一名が参加して開かれた。折しも浅草界隈は桜花爛漫の様を呈していた。

午前十一時過ぎより、柳澤副幹事長の司会で、この一年間に亡くなられた中村阪子氏及び三澤いつ子氏の二名の御霊に

黙祷を捧げ、奥太雅氏の開会の辞で始まった。

福島せいぎ会長



まず、福島せいぎ同人会会長が「今回は役員改選の年に当り、会長自らが任期満了により、平成二十四年から六年間の任を辞すことになった。『万象』を支える同人会の主体性は『研鑽』と

代会長の中山純子氏のたつての願いで福島せいぎ氏に会長をお引き受けいただいたが、氏は徳島市の『万福寺』の多くの檀家を有する住職、俳誌『なると』の主宰他、多くの要職に、ご多忙極まりない等を鑑みて固辞された。又、幹事長の内藤恵子氏には大磯での第一回同人会総会から、十五年間の長きにわたりご尽力いただいた。辞任されることになり残念である。が、同人会が元気でないと『万象』が良くならないので、新会長には、これまたご多忙極まりない柳澤宗正氏に諸事情をご理解いただき、お引き受け願った。『研鑽と親睦の場』を地方に設けたり、新しく『俳句賞』を新設する等に歩み出す柳澤新体制となり、楽しみにして欲しい。これまで六年間ご尽力下さった福島体制に心より感謝申し上げたい」と挨拶された。

『親睦』にあり、『親睦』こそ最も大事なことで、一年に一度の出合いを深める意味があり、今日の議事進行を皆様と共に楽しく進めていきたい」と挨拶された。

次いで、内海良太主宰より「役員改選に当り、六年前、初

次いで、発行人小林愛子副主宰より「万象」の現状について、同人百六十二名、会員三百二十六名、計四百八十八名と五百名を割ったことは遺憾なこと、発行数七百部などとの報告があり、続いて江見悦子編集人より、誌面は三本立て（①同人・会員の作品②それに纏わる鑑賞など③企画もの）と



柳澤正新会長

の編集内容や、編集部
の構成（編集八名、校正九
名、発送一名）の説明と
紹介があり、頁を増やさ
ず充実した『万象』誌を
会員と共に目指すこと
を述べられた。

この後、福島会長が議
長となり総会議事に入
った。始めに内藤幹事長より、この一年間の活動報告を前に、
退任される旨のお話と積年の想いの挨拶、これからの同人会
への希望と感謝の報告がなされた。ここまでの黒字の積み重
ねは内藤さんのご尽力のお蔭であつたと、会長より一言が添
えられた。

奥太雅會計担当により平成二十九年度収支決算報告、及び、
山本とく江監査より平成二十九年度収支決算報告は承認され
た。

続いて役員改選に移り、内海主宰より推挙された柳澤宗正
新会長、副会長に中條睦子氏、山本麓潮氏、幹事長に吉中愛
子氏、副幹事長に古川京子氏が発表された。

新旧役員の挨拶がなされ、福島前会長の「六年間に亘り、
ご支援ご協力賜った同人の皆様へ厚くお礼申し上げ、新会長
のもと『万象』の今後益々の発展を期待する」との言葉を享け、
柳澤新会長は「任期の三年間、皆様のご支援をお願いしたい。

同人会総会への出席者数の激減等、同人会の在り方が問われ
る。片や、『万象俳句会』自体の会員減少により財政苦境の打
開の必要がある。加えて内海主宰より『中山純子記念俳句賞』
を新設し同人会が主管せよとの予期せぬ構想と実施案が示さ
れるなど、難題ばかりだが、



吉中愛子新幹事長

お力添えを頂き解決していく
所存である」との力強い挨拶
を頂いた。

引き続き、平成三十年度
の活動方針が吉中愛子新幹事
長より説明があつた。

同人会としての今年の取り
組みとして

①創刊時に比べ半減している会員の増強。今後一年間で同
人一人が会員一人を増やすようお願いに努力すること。

②発行人挨拶の財政状況に鑑みて、万象俳句会へ財政支援
すること。今年度は三十万円。同人会の五千円の年会費は今
年度は引き下げず据え置き。財政支援の一部を以前から要望
の強い万象俳句会の編集集その他の業務に携わる方々への交通
費等に充当。

③今後同人会をどうするか。これまでのように四月に開催
するか、一月の中央新年俳句大会又は秋の全国俳句大会に
合流の考えも一長一短がある。今後、皆様の意見を聞き決め
たい。その他、同人名簿の見直しも経費節減の観点から進め



内藤恵子前幹事長

たい。

その後、収支予算案が奥太雅会計担当よりなされ、全ての案件は拍手で承認された。

総会議事終了後、出席の新人五名の紹介があった。

最後に、新会長が「今年最

大のイベントは主宰から別紙の提案の『中山純子記念俳句

賞』の実施である。今後細部を詰めていき、同人の実力アップの観点からも従来の「万象俳句賞」と並び立派な賞に育てたい」と決意表明された。

この後、一時間の昼食に入り、その間に、主宰以下五名の選者により選句がなされた。

昼食のあと、午後一時三十分より「万象」顧問山田春生氏の講話「欣一俳句に学ぼう」に耳を傾けた。懐かしく、有意義な四十五分間であった。（講演内容は七月号に記載）

二時三十分より六名の選者の

選句発表がなされた。披露は芝宮留美子、加山ひさ子、三屋英俊の順番で行われ、披露後、選者からそれぞれの選句について、逐一丁寧な講評があった。

次いで、十五年の長い間同人句会にご尽力頂いた内藤恵子前幹事長に謝礼が授与され、最後に、内藤前幹事長より閉会の辞が述べられ、午後三時四十分に関人会総会を終了した。この後、会場近くの喫茶店「レインボー」にて、新役員、内海主宰以下、希望者二十七名が参加して歓談、散会となった。

同人会総会句会

内海良太主宰選（○は特選）

○かげろひの堤や木歩呼ぶ声す
文学者の眠る地どんぐり芽吹くかな
大屋根をはさみて二重花の雲
青楓二天門へと枝伸ばす
花片の一つが仲見世裏通り
葦焼の煤三鬚嶺を越えにけり
霊園に師のこゑかとも呼子鳥
初音聞く節生家の屏中門
浅草寺抜け来し靴に花の塵
木の芽晴れ草の匂ひの花川戸
飛花落花うまやの馬は常の貌

曾根 満
中條 睦子
古川 京子
久留島 規子
片桐 帆一
鍋島 広子
井村 和子
鍋島 広子
阿部 澄
江見 悦子
柳澤 宗正

春の夢阿波の船路を貫之と
僧言へり今日最高の桜です
スカイツリーかすむや花の二天門
前を行く人へ落花のつむじ風

三屋英俊
吉中愛子
沢辺たけし
大長文昭

小林愛子副主宰選（○は特選）

○月光にあをぎめゐたり花筏
靈園に師の声かとも呼子鳥
木の芽晴れ草の匂ひの花川戸
一葉の机の小さき花の雲
春の夢阿波の船路を貫之と
恋の猫仲見世通り馳け抜ける
兜太の手のやはかりけり桜散る
墨堤の潮満ちてをり朝桜
胸もとの真珠ひと粒初出社
蛙合戦うち重なりて毬のごと
原田しずえ特選
初桜眼鏡を作り替へた日に
山田 春生特選
満ち潮に抗ひうねる花筏
飛高 隆夫特選
風よりも日に傷つきて白木蓮
江見 悦子特選
見納むる今年の桜浅草寺

原田しずえ
井村和子
江見悦子
広瀬俊雄
三屋英俊
大橋雅子
田中道江
谷田部 栄
大内佐奈枝
大長文昭
新妻奎子
柳澤宗正
荻野加壽子
久留島規子

独り言

婦路の車中「万象」同人会の
歩み（一回〜15回）を見直した
時、十五年間の変遷と重みと、
それを支えてきて下さった内
藤恵子さんのお顔が自ずと
オーバーラップしてきた。私は
第三回の敦賀に同人として初
参加、それ以後は毎回出席して
きた。それは、「内藤ツアー」
（佐野の独自の命名）に声をか
けて頂いて参加出来、楽しい旅
でもあった。

但し、感慨に浸るだけでなく、
今大会は何と明るく愉しく、終
始、和やかムードだったことか。
内海主宰、柳澤新体制の幹部の
皆様が多く、難題を打破しよ
うと思いついた策を考え、具体
案を提示して「会員みんなで乗
り切りましょう」という方針に
よるのかなと、勝手な独り言。



水温む 西本才子

文殊菩薩先づ拝しけり探梅行
 枯蘆の向う岸へところぞり伏す
 富士の裾海まで伸びてクレソン畑
 家裏を湧き水はしる雛の家
 チエロ負うて並木の桂芽吹きけり
 時の鐘聞いてをりたり紅椿
 水車ひびける水や蜷の道
 初蝶のつまづき四つ目垣越ゆる
 春の鴨せせり続ける川昏し
 遠目にも白浮きあがる海芋かな

水が美しい町を見たくて、三島に行つて来た。駅近くには旧宮邸もあり、一般公開されている。三島は富士山よりの雪解け水がやがて地下水となつて市内各地で湧水が見られる。町を流れる川も美しい底が見えて、市民の散歩道となつていた。家の裏側が川に面しており、そこに人々の生活がある。芭蕉句碑も道に建っており通る人々を和ませて呉れる。下校の子が立ち寄っていた。日本は水が綺麗で美味しく使用制限もなく使えて有りたいことである。



オホーツク海高気圧 玉田 瑞穂

海明くるロシアの岳の白さかな
耀声に春日の鱗ひかり合ふ
春塵や乾びし雑魚の面構へ
餌籠のころがる音や戻り寒
一湾の帆網鳴らすや春疾風
海市失せ港に大き気圧計
漁夫ひとり網繕へる沖霞
永き日の梯子を降りる船大工
星おぼろ肢より暮るる鷗どち
汐汲みの五右衛門風呂や夜半の春



道東のオホーツク海沿岸からは、殆どの地点から今ではロシア領の択捉島、国後島、色丹島、齒舞諸島がよく見える。特に根室の納沙布岬とロシア領の貝殻島は正しく指呼の間である。

オホーツク海の春は、澄んだ薄いブルーに包まれて美しいのだが、何故か春愁とは違う重い気分が払拭されないのだ。

オホーツク海高気圧の好天の中に居て、蜃気楼も含め夢、幻のような旅であった。その記憶の残像を辿ってみた。

うりずんやみやらび句碑と小半日

あがるいの大ぬし／大王が御まへに／くねぶけはおへておちへ／おれづむ またな／いな ちやはな さちやる（おもろさうし・十三卷九八二） 東方の大王 大主の御前に 九年母木を植えて ウリズンを待とう おや、もう花が咲いたよ（外間守善・南島の神歌）

〈うりずん〉は、おもろさうしにも謡われている沖繩の古語。旧暦の二月から三月の頃、大地の潤う季節である。おもしろでは「若夏」の同義語として使われ、歳時記では、「うりずん」は春、「若夏」は夏に載っている。雨がちなこの頃ではあるが、沖繩の昔人が「うりずん待たな」と謡ったように、この日のために沖繩はあるのだと思えるような、光に満ちるひと日もある。

〈みやらび句碑〉は、〈夕月夜乙女の函の波寄する〉「沖繩吟遊集」の欣一句碑。沖繩本島最北端辺戸岬に建つ。作者が句碑と共に過ごした辺戸岬。遠く与論島を望む海は、穏やかな白波の立つ日であったろう。荒々しい岩肌を撫でるうりずん南風は、欣一への思いをより深くする。〈小半日〉のさりげない措辞は、旅人として過ごす沖繩への挨拶である。この稿のペンをとる日も、島はうりずんの光と風のまぶしい一日であった。

みやらび句碑 訪はな……。

（前田貴美子）

オーデコロン 黒人姉妹歌ひ出す

主宰は沖繩で勤務していた時期があり、句集に「花ゆうな」という章がある。章中沖繩での嘯目と確認できるのは「みやらび」三句であるが、それに続いているのがこの〈オーデコロン 黒人姉妹歌ひ出す〉だ。この句には沖繩詠と特定出来る言葉はないが、おそらく間違いないと思う。それはこの句が醸し出している空気感であろうか。「オーデコロン」は、夏の季語「香水」の傍題だがここでは爽やかな感じではなく、逆にむしろ蒸暑い夜を感じさせるのだ。黒人姉妹はゴスペルかR&Bか、或はジャズを歌おうとしている。「歌ひ出す」という複合動詞には体をゆらす動きが感じられ、黒人独特のボディランゲージと大きくひらく厚い唇が見える。句の下五が外に開かれた形になっているので、読者はその先を自由に想像を拡げる事になる。賑やかなナイトクラブ。歌声はユニゾンからポリフォニーへ。汗とアルコールの混ざった匂いや熱気。軽快にスイングするピアノの音色や強烈なフォールビートを刻むウッドベース、弾けるようなドラムのポリリズムなど、視覚、聴覚、嗅覚等五感をゆさぶって生命感に満ちあふれる時間、空間を想像して楽しむ事が出来るという訳だ。

（大澤宗弘）

白菖蒲に囲まれ昼を眠りたる

平成二十三年上梓の愛子第二句集「辻楽師」所収の掲句は沢木欣一の選を経た平成六年の作。

句集のあとがきに「この道に入門してより即物具象を学び、各地に足を運び吟遊する事が多かったが、最近では身辺を見つめる時間も増えた。いずれにしても日常茶飯のなかで人間を含めての大自然に對し問いかける姿勢を持ち続けたいと願っている」と記されている。

この「白菖蒲」の句と、見開きの頁に「細見綾子先生」と前書きを置く〈何草といはず新芽の皆美しと〉の一句を見留めたとき、何でもない日常の暮しの中にあつて、対象と心を交わし存問する心情は、まさしく綾子先生に相通ずるものと認識をした。

自註句集にも採用の「白菖蒲」の句には「花菖蒲は日本人が昔から品種改良をしてきた世界に誇れる植物。その心意気を感じて肥後菖蒲を庭に育ててきた。仕合せな時間である」の自註がつく。丹精こめて庭に育ててきた花菖蒲……葉の間から抜きんでた茎の先の優美な白花を愛しみ、安らぎに浸る至福のひとつを「昼を眠りたる」と表白、稚拙な鑑賞など不用にして読み手の心に余情をかもす一句である。

(井村和子)

あやとりの橋伸びきつて春の昼

あやとりは、日本だけではなく、世界中のいろいろな国に、昔からあった。文字がなかった時代には、ものごとを後世に伝える手段のひとつだった。

日本では江戸時代前期に発行された俳諧集に、あやとりの俳句が残っている。すであやとりがおこなわれていたと考えられる。母から子へと教えられてきた。

私の住む立川市では、小学校の授業としてお年寄が生徒たちにあやとり、おはじきなどを伝えている。地域の老人ホームへ子供たちが訪問し、入所している人々と昔遊びを伝承している。

ゲーム機器に親しんでいる子供たちには新鮮のようだ。神さまが魔法をかけたように、木には花が、大地からは草の芽が出る。だが気がふさぐこともある。

あやとり遊びは、秋でも、冬でもない。いわんや夏でもない。春でなくてはならないのだ。

ゆったりと時間が流れる昼下がり、お気に入りのオペラを聞きつつ考えを巡らせあやとりをしている。指をすべらせ橋のあやとりを長くしてしまった。

掲句には「橋伸びきつて」と思いを詠み込んでいる。俳諧と軽み、反面、寂しさ、悲しさを感じた。

(足田華子)

おいしい話

その⑨

【雨の名前】

高橋 順子

雨に濡れるのは春雨でもない限り、いやなものだが、雨を見ているのは心がなごむ。十何年か前に『雨の名前』という写真付きの本を出した。佐藤秀明さんの写真は、雨に濡れて息を吹き返したように鮮やかな風景を切り取っている。撮影中は機材が濡れてたいへんだったそうだ。もちろん自分も。

私は気象学者でもないし、言葉が好きで詩を書いていくだけの者だが、辞典類と首つびきで雨の名前を四百以上集めた。季語となつてゐる雨の名前は、歳時記で数えてみると三十幾つにすぎない。この国の細分化され、生活になじみ、美しく、時にユーモラスな表情をもつ雨の名前は、ひととき雨のうっとうしさを忘れさせてくれる。

私が好きな雨の名前は、肘笠雨（ひじがさめ）にわか雨。肘を頭にかざし、袖を笠の代わりにする）、遣らずの雨（客や恋人を引き留めるように強く降りだす雨）、男梅雨、女梅雨（ザーツと降ってサツと止む梅雨、しとしとと降り続く梅雨）、狐雨（日が照っているのに降ってくる小雨）、緑雨（青葉に降る雨）……。

公益社団法人 俳人協会

俳人協会発行 脚註名句シリーズ

『細見綾子集』

綾子先生の全句集より三〇〇句を抜粋し、元「風」同人、会員、誌友が鑑賞しています。「万象」では三十五句を、主宰以下二十六人が執筆しています。どうぞお求め下さい。句会毎にまとめて下さると助かります。

頒価 ● 一冊のみの場合 一四〇〇円（送料共）

● 四冊以上まとめた場合

一冊 一三〇〇円（送料共）

購入申込み方法

葉書に ①冊数 ②お届け先住所 ③氏名を明

記の上、左記へお申し込みください。

〒168-0071 東京都杉並区高井戸西

二一八一ー一一〇七

久留島 規子

尚、代金は左記へ振り込み下さい。

ゆうちょ銀行10220-39490831

（「万象」担当 久留島規子）

入金を確認後、順次発送します。

春立ちぬ 榎本文代

作者は「万象」の編集に長く携わっておられる。身ほとりを詠んだ一連の作品の、しなやかで無理のない表現は、独特の趣がある。

ひとりなる卓に影おく冬林檎

長い人生には、このような時を過ごすこともあるかと思われる。ただの林檎ではなく「冬林檎」が効果を上げている。俳句は気宇壮大にといわれているが、静物画のような句に何故か心惹かれる。

枝移りしそこね一つ初雀

リズムに少し難があるような気もするが、そのリズムにより枝移りに失敗した雀のおかしみが出ている。元日の雀の有り様が初々しい。

文机に坐れば日脚伸びてをり

お正月を過ぎると徐々に日差しが明るさ、暖かさを実感するようになる。創作の時間でしょうか。派手さはないが普段の生活の中から生まれた然りげない句に好感を持つ。ほっとした気分も言外に。

赤ん坊のまあるきあくび春立ちぬ

赤ん坊は見ているだけで幸せな気持ちにさせてくれる。「まあるき」の少々間延びした表現が赤ん坊の愛らしさを際立たせ、句のポイントになっている。寒さはまだ厳しいとはいえず立春を迎えた。幼子の健やかな成長と安らかな日々の予感。

神田川 名和政代

固有名詞に頼らない句をと常々思っているが、一連の作品は固有名詞を除いては成立しない。万太郎の「神田川祭の中をながれけり」を思い浮かべながら、作者の神田川への深い思い入れを感じた。

新緑やレリーフ白き医学校

東京医科大学の外壁のレリーフを詠んだ。白は白衣を連想させ「新緑」との取り合せて爽やかな句となった。

枯芭蕉なれど水打つ芭蕉庵

神田川沿いの関口芭蕉庵の句。枯芭蕉は休眠期の芭蕉。水を打つこともあるのだろうか。「水打つ」は「水遣る」とした方が違和感がないように思われるが。

神田川昔も今も川普請

芭蕉は神田川の普請に係わった。現在も温暖化によるゲリラ豪雨等による溢水の危険を孕んでいる。「昔も今も」の措辞は作者の率直な感慨。

冬北斗逆さにかかるニコライ堂

中央新年俳句大会が開かれる新お茶の水ビルの近くにニコライ堂がある。銅葺きの青いドームが美しい。「逆さにかかると」がこの句の眼目。空気感も伝わってくる。

聖堂に素読の漏るる淑気かな

都心には稀な静けさの中、湯島聖堂から論語の素読が聞こえてきた。作者は声に新年のめでたさを感じとった。

同人作品評（四月号）

広瀬俊雄

流水はパズルのピースオホーツク海 瀨谷和代

アムール川の淡水域で凍り始めた氷は、次第にオホーツク海を埋め、春になると割れて南下、北海道の沿岸に達する。観光船ガリンコ号とかオーロラ号などで見学が出来る。様々に入り乱れる氷塊を、パズルのピースと捉えた感覚が知的で新鮮である。

白波や増毛連山眠りたる 紅露恵子

積丹岬から雄冬岬にかけて弧を描く石狩湾の奥に、増毛山地がある。最高峰は暑寒別岳である。小樽方面からの景観は素晴らしく、白波の立つ海を隔て続く山々に驚かされる。それらが、冬をまえに眠るように横たわっているのだろう。

真夜中の静寂極まる黒川能 阿部月山子

黒川能は、庄内地方の郷土芸能だという。世阿弥の猿楽の流れを汲むが、どの流派にも属さず、五百年にわたり伝承を受け継いで来た。住吉神社の神事なので神主の祈祷からはじまる。旧正月に行われる「王祇祭」は最も重要なもので、夕方から能や狂言が夜を徹して演じられる。静まりかえった真

夜中にそれが極まるのだろう。

ブンゼンの炎の青さ寒の雷 高橋ひろ

ブンゼン・バーナーを、理科の実験で使った人も多いだろう。ドイツの科学者ロベルト・ブンゼンの発明と伝わるが、バーナー下部のガス用の螺子と、空気用の螺子を調節することによって高温を得る。高温状態の炎の色は青白い。燃焼の轟音に、寒雷の響きを共感した。

初乗りの電気自動車一族 大村かし子

世界に先んじたハイブリッドH Vも、電気自動車E Vや燃料電池車F C Vにとって代わられる情勢である。F C Vは水素を使う難しさがある。E Vは、取扱いやすく家庭でも充電できる。一家は、早くもE Vに注目して正月の初乗り体験をしたのだ。

あるじなき卓に日のさすお正月 大坪貞子

この句の主とは、療養中の大坪景章先生のことと察する。いつも仲良く談笑し、食卓を共にした夫が入院した。その淋しさとやるせなさが偲ばれる。その食卓に、お正月の日がさしこんで、作者はふとした安らぎを味わっている。

空広き武州に冬の流星群 内田郁代

流星群の中でも双子座流星群が人気だ。それは、安定した観測ができるからだ。最盛期は十二月上旬から中旬頃。流星

群の正体は、彗星が放出しているチリが地球大気との摩擦で燃焼するからである。「空広き武州」が眼目。

昭和 一桁とつこい生きて初句会 谷田部 栄

作者は昭和 一桁生まれ。「まだまだ若い者には負けない」「どつこい生きてるぞ」という、ベテランの気概を感じさせる軽妙洒脱な句である。

冬帝の日差し束の間兜町 吉中 愛子

兜町は東京証券取引所を中心とした金融街である。この一帯の日本橋川の上を走る高速道路で、冬はもとより夏でも日差しは短く、なにより日本橋の景観を破壊してしまった。兜町の束の間の日差しから、株景気の儚さを予測したか。

身をのせて刃入るる冬至南瓜かな 寺沢千都子

南瓜を切るのは大変である。私も南瓜を切る時だけは引き受けた。小さければまだしも、大きいと全身で切らなければならぬ。「身をのせて」に具体性がある。

初転び初を冠せばめでたきや 福田雅子

初日の出から始まって、新しき年には、初を冠せた言葉が多くある。大体は目出度いことに冠せるが、初転びは頂けないかもしれない。でもまあ、初の子にあやかり目出度いことにしましょう、という俳諧味のある句。

戦争の文字のちらつく去年今年 柳澤 宗正

季語の去年今年をこのように戦争の危機感と結びつけたのは珍しい。世界中いともどこかがきな臭い。民族紛争や、宗教戦争などなど。シリアの内戦で犠牲になる子供達が気の毒だ。ロヒンギヤに対する迫害も憂慮される。日本も核と核の狭間にさらされ、束の間の平和の中にあるのかも。

ドアノブに濡れ手張り付く寒の朝 海野みち子

冬山で気をつけなければならないのは、ピッケルの金属部分に触らないことだ。触ると凍て付いて、無理に剥がそうとすれば皮もはがれる。この句に、そんな寒さを思い出す。

あめつちを開くがごとく深雪搔く 中條睦子

今年の北陸地方の大雪の映像を視れば、いかに大変だったかと想像できる。平年にくらべ金沢の積雪は三倍であったという。作者はこの大雪を掻き出す様子を「あめつちを開くがごとく」と表現した。

冬至雑炊ニライカナイの塩ふれり 中本 清

ニライカナイは、沖縄県や奄美群島の各地に伝わる概念である。この世の外のひとつで、理想郷とも言われる。遙か遠い東の海の彼方、または海の底、地の底にあるとされる。豊穡や生命の源であり、神の世界でもある。そういう理想郷からの塩をふった雑炊は、さてどんな味がするのだろう。

蜥 蜴 出 づ

阿 部 澄 (佐野)



料 峭 や 八 溝 の 奥 の 雲 巖 寺
玉 砂 利 へ 一 歩 に 滲 む 雪 解 水
浅 春 の 大 甕 魚 の 影 は や し
齊 垣 の 窪 み に ひ そ と 春 の 三 毛
岩 を 打 ち 逆 波 立 つ る 雪 解 川
残 る 鳴 遠 ざ か り ゆ く 沼 し づ か
初 桜 一 樹 に 野 鳥 つ ぎ つ ぎ と
蜥 蜴 出 づ 目 ばかり 動 く 石 の 上

初

午



佐藤嘉洋 (秦野)

冬紅葉湖畔に古りし弁財天
幼子へ力士の手より追儼豆
初午や富士の笠雲動かざる
シャツを干す靴の踏みたる路のたう
紅梅の中や白梅二三輪
恋猫の昼は庭木を見上げをり
春寒や手に戻りたる航空便
丹沢の空の青きにいかのぼり

万葉ノオト

テーマ

「時計」



札幌時計台

札幌 竹重富子

札幌の時計台は市中心部にあり、ビルに囲まれて目立ちませんが、その端正なたずまいには心ひかれるものがあります。それは古いものの持つ威厳なのかなと思います。

三月も末、久しぶりに時計台の館内施設を訪れました。もとは札幌農学校の演武場だった建物、今は各種催しの行われるホールの広い空間で、しばし明治の開拓時代に思いをはせます。

演武場に付設された時計塔が時を知らせ始めたのは明治十四年八月十二日、鐘の音はかつては一里四方に響き渡ったそうです。ひんやりとしたホールでちょうど正午になり、すっかり忘れて

いた鐘の音を聞きました。

外へ出て建物の周囲を歩いてみます。

日差しは春です。まだ雪の残る中に今年初めての福寿草を見つけました。

腕時計

つくば 阿部より子

腕時計を身に着けなくなつて何年になるだろう……。すっかり携帯電話が時計代わりになつてしまつた。今ではお蔵入りになつて、止まつたままのそれらをたまに眺めて懐かしんでいる。

それぞれに思い出がある。さすがにこれは手元にはないが、一番の思い出は、高校に入つた時に買つてもらつた初めての腕時計。

高校のある町の時計屋さんでのごと、金属製バンドの時計であつたが、既製の長さでは足りず、私の腕を眺めて「丈夫ですな」と言つてパーツを二個ほど足してくれた。

このことは、乙女心にはとても恥ずかし、時計を買つてもらつた嬉しさよりも印象深く覚えていた。でも、今

になると、そのはちぎれるほどの腕とそのおじさんが懐かしい。

兄の腹時計

横浜 佐藤正美

陸奥の寒村に生まれた101歳の兄は、弟の私を幼時から特に可愛がり、97歳になる今でも思いをかけてくれる。

農家の日課は、朝・午前・午後と仕事に区切りをつけて、食事の時間となる。兄が時計を付けたのを見たことは無いが、兄の腹時計は不思議なことに時計に合わせたように正確である。農家の副業である炭焼きも時間管理が重要であるが、兄の腹時計が役立った。時間温度管理を誤ると煙が残る炭となり、一等炭とはならず等外品で販売できないため、手が抜けないのである。我が実家の近代農業経営においても時間管理の指導が目についた。食糧政策の前進に大きな使命を果たす農業経営の前途に大きな繁栄を祈念せずにはられない。私も100歳を目前に、兄の腹時計生活を改めて注目している。

オルゴール時計

東京 岡村純子

六月十日は「時の記念日」、天智天皇の水時計が時刻を知らせる事からはじまり、大正時代に「日常生活を合理的にしましょう」と定められました。

私にとって時を告げる時計といえば、サントリーホールの開場を告げるオルゴール時計が印象的です。サントリーの社長、佐治敬三が世代を超え文化、社会貢献活動として、創業者の鳥居信治郎の信念である「利益三分主義（顧客サービス・利益還元・事業拡大）」へ役立てる事を受け継ぎ、世界一美しい響きのホールとして作られたとか。滝の音を聞きながらカラヤン広場で開演を待つ時間も楽しいものです。

一日の二十四時間、俳句の十七文字。いずれも無駄を省いて大切に。

プレゼント成功!

長野 奥山ひろ子

同僚の新築祝いに、時計を贈ること

にした。

デザインはシンプルで、正確さが大切だから電波時計にしよう。脈拍を計ったりするかもしれないから秒針はあった方がいい。そういえばこし小学校に入学する娘さんがいるから、文字盤には数字が入っている方が時計の読み方の勉強に役立つだろう…などと、余計なお世話なことまで考えていると、夫から「秒針はいいけど、コチコチ音にするのはよくない」と助言が入った。さらに建てた家の雰囲気さをさり気なく聞き出し、白木の枠が合いそうということになり、最後に予算という最大の条件をプラスすると、一つに絞られた。渡した瞬間、「こういうのが欲しかったんです!」と喜んでもらえた。末永く幸せな時を刻んでね。

桜が散る前に

千葉 高田みや子

私の腕時計は大きくて算用数字で男物。針は2分ほど進めてある。最近、お店や宿の部屋に時計が無いことに驚

かされる。時間を忘れて買ひ物や非常の時間を楽しむための配慮らしい。そういう私は針を進めていてもよく人を待たせ、毎日愚図の大忙しの日々。全くいい加減な人間である。

先日、満開の枝垂れ桜と臘月を二日間続けて写真に撮った。出来上がった写真を見て驚いた。一日目、桜の枝の間の臘月は暗闇の中で煌々と輝き、二日目の臘月は何と蒼い空に浮かんでいた。同じ構図だが十五分間の違い。時計を見たからはつきり覚えていた。

この変容の十五分間、桜の前にじつと身を置いていたら何か句が詠めるのだろうか。桜が散る前にそんなことを考えている。

「万象ノオト」投稿募集

▽10月号「神 様」(6月末日締切)

▽11月号「おしゃれ」(7月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒168-0071 東京都杉並区高井戸西

2-18-1-1107 久留島規子

三冊の松

岸本葉子著

『俳句で夜遊び、はじめました』

卯辰 美苗



年間約二百冊を乱読している。料理、旅行、骨董、手芸、キャンプ、俳句、文学とジャンルは広い。昨年の全国大会の投句受付、今年の新年会の会費受付と初めてのお役を経験。いずれも私にとっては神経をすりへらす大役であった。それで、本を選ぶ基準が変わった。心のどこかにいつも不安感があり、精読する事ができなくなり、楽しめる本を乱読するようになった。

夜は、暗いし怖いしと出かけない事になっている私が手にした本は、『俳句で夜遊び、はじめました』岸本葉子著です。月刊「俳句」二〇一四年二月号〜二〇一五年七月号の連載を単行本にしたもの。

彼女は「NHK俳句」の司会をつとめている縁からか、羨ましいほどの著名人の句会に誘われている。例えば、西村和子、星野高士、小澤實、今井聖、宇多喜代子、大石悦子、茨木和生、石寒太、片山由美子、黒田杏子、榎未知子、高野ムツオ等である。

季語には夜しか出会えぬものがあると気づいたとき、「夜」の位置づけが変わりました。「夜でも遊べる」から、「夜だか

らこそ遊べる」へ。より積極的な価値を見出すようになったのです。と語る。

六本木の骨董店、神楽坂の旅館、街角の居酒屋、吉野の山奥など十五の夜吟（ヨギン）を、彼女ならではのエッセイストとしてのタッチで紹介。どの句会も楽しそうで、緊張感もあり、共感でき、勉強になり、御得感十分。

読み進めていくと、私が初めて耳にする言葉がでてきた。「袋回し」である。席題で作り、短冊を入れた袋を回して選ぶ形式の句会で、二次会などでよく行われるとか。

彼女が体験した袋回しの方法は、①ひとりに一枚封筒を配る。②封筒の表に題をひとつ書く。③その題で句を作り、短冊に書いて封筒に入れる。制限時間内に何句でも。④合図に従い、封筒ごと右へ。左から来た封筒で③以下を繰り返す。合図するのは未知子さん。タイムキーパーに徹するようだ。後で聞くと、一袋目だけウォーミングアップを兼ねて四分に、二袋目からは一分にしたという。

即吟でのパニックの様子が臨場感にあふれ楽しい。

「袋回し」楽しそうじゃない。私の出席している句会でも出来るかなあーとワクワクした気分になった。

偶然に、この本を読み終えた俳句の先輩に感想をお聞きすると、「実践的で面白かったよ。私達もみんな若かったから、あちこち吟行もしたし、楽しかった。即吟をしたり、もちろん袋回しをしたよ」との事。

先輩の皆様。どうぞ楽しかった経験をご伝授下さいませ。

俳人 木村三男 〔栃木〕

亀田やす子

昭和五十九年五月以来三十四年間続いている、栃木県句会報「栃の葉」は、当時の「風」県支部の船山順吉、植木火雪、三関浩舟、大信田梢月等が立ち上げたが、その根底には、「風」の重鎮であった木村三男の存在が大きく影響している。

木村三男は明治四十一年茨城県生まれ。千葉大医学部を卒業し、栃木県石橋町（現下野市）に木村医院を開業した。

俳句は昭和十三年頃短歌とともに始めた。作歌は間もなく中断し、俳句一筋に精進。「かびれ」同人を経て、昭和三十年六月「風」に入会し再出発。三十三年十一月に同人。翌三十四年に第四回「風賞」を受賞している。三十九年三月処女句集『藁』を、五十二年五月第二句集『下毛野』を発売。

「ぼくの俳句は、その瞬間に生まれる即興のもの、宵越しが出来ない。云わば日記の一節なのかも知れない」と『下毛野』のあとがきに書いている。

藁塚に風のなき日を死ぬもよし 句集『藁』
耳に当て山藪遠い音を出す 句集『下毛野』

また、俳人協会会員、栃木県俳句作家協会副会長、栃木新聞俳句欄の選者を務め、後進の指導に当たっていた。

三男は「風」においても栃木県「風」俳句会の最初の指導

者であり、宇都宮、佐野、佐久山の三句会を立ち上げ、幅広く指導していた。当時、佐野句会の植木火雪が「指導的な面では、石橋町に在住し医師を業とし、殆んど欠かさず出席し懇切に指導して下さる」と「風」誌に書いている。

三男の指導を受けた船山、植木、三関、大信田は、後の指導者となり「栃の葉」を通して各地域に会員を増やした。引き続き「風」から「万象」に移行し、現在に至っている。

「風」誌に、当時の同人谷口秋郷が「木村三男の作句素描」と題して「木村さんの俳句の根底には、その表面の無愛想さや皮肉さとはうらはらに、極めてヒューマンで純粹なものが湛えられている」と書いている。

三男は昭和五十三年十月二十一日に脳出血にて死去。享年七十歳。この日は鳥羽市で「風」全国鍛錬大会が行われており会場に三男の訃報が届くと、沢木主宰は大変哀しまれ「木村三男の訃報はとても残念である」と冒頭で挨拶されている。

細見綾子先生が、木村三男家を訪ねた時に「枇杷の花遺影に辞して帰る時」と追悼句を詠まれている。

三男の句碑（耳に当て山藪遠い音を出す）は、故郷であるつくば市の菩提寺「歓喜院」の鐘樓の脇に建っている。

参考 昭和五十四年「風」誌

一、二、三月号より



俳書探訪

古川京子

『右城暮石の百句』

茨木和生著

ふらんす堂

二〇一七年一月一〇日初版発行

右城暮石（一八九九～一九九五）を生涯の師と仰ぐ茨木和生氏が、暮石の百句を選び、「酬恩」を心に一句一句に丁寧な注釈を添えて編み上げた、読み応えのある一書である。

青空の深くて曲る雲の峰

『声と声』昭和十年作

雀等の眼もにぎやかに鳥威

『声と声』昭和三十三年作

大学生最後まで観る後宴能

『上下』昭和三十四年作

注釈より（一部省略）

二句目、音で雀をおどろかす鳥威してはなし。人は創意工夫を凝らして鳥威しを考案している。日差しを反射してキラキラ光るものを考え出す。雀らもその鳥威しのにぎやかさを

喜んでいるのかも知れないと暮石は思っている。

三句目、後宴の能は

十二月十八日、若宮様に戻られたお旅所の仮御殿を背にして演能される。能四、五番と狂

言三番の本格的な野外能である。小雪のちらつく日もあったりし、最後まで見るのは辛い。この句のモデルは私である。

父やさしく母きびしくて雛祭

『上下』昭和四十二年作

蛇もまた人間嫌ひひた逃ぐる

『蛇峠』昭和四十六年作

薄雪を乗せし薄氷銀閣寺

『蛇峠』昭和五十二年作

體ちりの氷を白布にて砕く

『天水』昭和五十九年作

雲の峰白し地上の何よりも

『芸』昭和六十二年作

暮石は朝日新聞大阪本社の楼上俳句大会で松瀬青々を知り、青々の主宰誌「倦鳥」に入会。一九三五年頃は古屋秀雄、細見綾子と共に「倦鳥」の若手三羽鳥と呼ばれる。

一九四二年細見綾子の第一句集『桃は八重』の序文を書く。一九四六年「風」同人に。一九四九年「風」退会。一九五二年「筐（かたみ）」を創刊。一九五八年「運河」と改題し主宰に。一九九一年「運河」の主宰を茨木和生に譲る。

生涯に六冊の句集を発刊。スバル賞、蛇笏賞等を受賞。

遣影の手触れよこれこの露の臺

『蛇峠』昭和五十三年作

眼あくたび食事の時間虫の声

『散歩園補遺』平成六年作

其々の句に感じられる暮石の視線の温かさ、多くの著名な俳人との交流の中にあつて暮石と和生がきずいた絆の太さが読み手に快い。俳句力アップの漢方薬のような俳書である。

（筆者住所〒277-0083 柏市日立台二一四一二）



山蟻のあからさまなり白牡丹 はく 蕪村(新花摘)

福田 雅子

学生の頃、担当の教授がテキストに採り上げたのが、武蔵野書院版の「新註・新花摘」であった。彼は学生たちが古典を学ぶ時に活字の本ばかり愛用する傾向にあるので、この機会に原書に触れさせたいという親心からであったのだろう。

テキストは、蕪村の句文集として名高い「新花摘」の初版本を新たに撮影の上、影印に付したものである。

版下は勿論蕪村自筆の草稿で、この本の例言に説明しているように「極めて流麗潤達の能書」である。私は先ずこのテキストによって蕪村の世界に導かれたことを幸せに感じている。文字は時として人柄をも写す。この自筆本は、いわば蕪村そのものに思えた。彼の容姿、輪郭まで彷彿としてくる。

「新花摘」文中の「牡丹」の句には圧倒された。

金屏のかくやくとて牡丹哉
南窓と牡丹の客や福西寺
かたやしらぬの猫ごの蝶
かんをきりあゝいひみ
や廿日月も更け行く牡丹かな
山蟻のあからさまなり白牡丹
方百里雨雲よせぬ牡丹かな
詠物の詩を口ずさむ牡丹哉
山蟻の覆道造る牡丹哉
蕪村自註 覆道はやねのある廊下也

牡丹の花の豪華さは、實際目に見て知ってはいしたが、これら蕪村の句によって、改めて開眼させられた。例えば、金屏風と牡丹、黒い山蟻と白牡丹の対比、あたりを払う豪華さ、それを方百里雨雲よせぬと言いつつ切った大胆さは圧巻である。実に牡丹の花を表現して、これ以上の賛辞はないだろう。芳賀徹は「與謝蕪村の小さな世界」(中公文庫)の中で、蕪村に「日本のロココ詩人」という名称を与えている。そしてその比較として芭蕉の二句(彼の牡丹の句はこの二句のみ)を引用する。

牡丹薬ふかく分出る蜂の名残哉 芭蕉

寒からぬ露や牡丹の花の蜜 芭蕉

芭蕉の両句、一句は人と訣別の句、もう一句は新宅祝いの挨拶句で、「牡丹はいわば寓喩にすぎない」と評している。比喩も説明的である。最初述べたように、私は「新花摘」の初版本の影印によって、蕪村の世界に一步足を踏み入れた。

文字は時に人を表す。絵画的で屈託のない蕪村の筆致。それが私の蕪村文学入門の扉であった。扉を開けると、蕪村の牡丹が光彩を放って絢爛と眼に飛びこんで来た。

牡丹散て打かさなりぬ二三片

寂として客の絶間のぼたん哉

ちりて後おもかげにたつばたん哉

牡丹切て気のおとろひし夕かな

今、書き写して、蕪村の句の特徴を絢爛豪華と評しながら、彼の内に秘めた寂しきも伝わって来た。複雑な層を持つ文学者。その深層に分け入って味得しなればならない。

桔梗 きょうげ

純 (町田) じゅん

巻頭作家 (五月号) プロフィール



また、担当が飛高隆夫先生となった最近では、平成二十九年五月号、同三十年三月号で、

眉月の呀ゆるや師の訃受けし宵
四つ谷土手枯紫陽花の日の匂ひ
が選を得た。眉月の句で直接の師の眉乃先生を偲び、四つ谷土手では眉乃先生の師の欣一師を偲ばせて、そのしみじみとした感覚に評価を得ている。

今回は次の四句が巻頭選ばれた。

仁王像見比べて子の初詣
寒念仏踏切に列途切れたり
師の忌とて思はぬ出合ひ寒紅梅
月蝕を見てゐて大きくさめかな

純さんを取巻く環境、お子様三人は既に独立され、ご主人と二人だけの優雅な生活である。昨今は、編集部にも所属して活躍の場が更に拡大したが、伸び代の大きい方なのでその成果が待たれると共に、新しい句境を開かれることが期待される。

桔梗純さんは、昭和十三年八月広島県呉市の生れ。広島県立女子短大時代に、能楽研究会に所属して以来、謡の名文に魅せられて、いまだに謡本を捲つたり、能楽堂へ出かけたりしている。俳句に嵌ったのは、能の七五調のあの名調子に基因するかもしれない。

俳句との出会いは、川口崇子さんの紹介で岩崎眉乃先生の指導を得たことに始まり、平成十三年「風」に入会。花桃の咲き初む庭に雲降る。記念すべき「風」誌の第一歩である。程なく「風」の終刊に伴い、創刊の「万象」に入会すると共に、岩崎眉乃先生指導の本郷句会に参加し、本格的に腕を磨き、実力をつけていった。

桔梗さんは、総てに真面目で基礎から手抜きをせずに築き上げていくタイプである。他方で、好奇心も旺盛で新しい事柄に物怖じしないので、持ち前の堅実さと相俟って、俳句に限らず何事も確実にこなして周囲の信頼が厚い。

岩崎先生はこの事を素早く見抜かれて、早くから本郷句会の会計や幹事を任され、今日に至っている。

さて「万象」入会后、質実な研鑽を重ねて、平成二十四年一月号で四句入選。低く飛ぶ鴉ねらふか秋の蟬
抽んづるすすきばつさり刈られたる
帰る子を送りてしばし小望月
庭隅に白ばかりなり曼珠沙華
またこれに前後して、「万象作品の佳句」に於て当時の大坪景章主宰は平成十八年十月号、同十九年九月号で
走り去る蜥蜴にしつぽなかりけり
軽鳧の子のてんでに走る浅瀬かな
を取り上げて、ユニークな視点での確かな写生の眼に高い評価をされている。

(山本右近)

万象作品

飛高隆夫選



モダンなる古墳の壁画鳥雲に 佐倉 横川良子

赤べこの飾り揺らすや雪解風

初ざくら礎石ばかりの城址かな

春疾風凜々しき土偶の戦士立つ

料峭や齒こぼれの鍬研ぎし手に 土浦澤 照枝

春鷗ぼらの子銜へ翔ち急ぐ

引鴨の水面明るく浦静か

池の辺の径の泥濘み石路の絮

堰落つる水の泡立ち猫柳 日野 喜多尾明子

ねこやなぎ丈長ければ桶に挿す

眠らむと足折りたたむ春の鹿

見まほしき高尾の山の白堊 四街道 塗木翠雲

春寒や神の田に挿す藁の稽

補陀落の沖へ沖へと難流す

白梅や皇女眠れる丘の上

畑隅に幌かけて置く春子楳

開け放す菜の花越しの瀬戸の海 東京 杉浦一子

片言を返す幼子桃の花

風鐸の幽き揺らぎ風光る

切通し日矢の届きし藪椿

玄界の浜の砂飛ぶ春嵐 福岡 宮田千恵子

兜太逝く空の下なる梅真白

二胡鳴らす翁媼や雛の間
 月光の照らし出したる寝釈迦かな
 永き日の行つたり来たり檻の虎 長崎 丸本祥夫
 唐寺の甃を滑る黄砂かな
 海苔舟へ網の竹杭傾ぎけり
 苗床の苗の穂先の滴かな
 手の平に遊ばせてゐる紙雛 静岡 繁田たけ子
 鉄厚き防空壕や犬ふぐり
 初ざぐら一枝折られるたりけり
 犬の背に梅の花びら五六片
 囀の昂る村の目覚めかな 益子 光岡れい子
 七つ八つ辛夷ほどけり陶干場
 恋猫の声からみあふ夕間暮
 座禪終ふ春の曙すみれ色
 春一番峽の竹林逆巻ける 桑野 佐藤嘉洋
 啓蟄の土手を小鳥の啄める
 鍋と釜ぶつかる音や寒戻り
 物干へ蔭なす庭木剪定す
 朝晴れや松葉の垂氷日を弾く 札幌 勝木享子
 日々のこと全てアドリブ春の雲
 赤松の木肌艶めく雪解風
 雪冠石灯籠のそれぞれに
 北浦詩子

寝そびれて奥歯の疼き冴え返る
 春日差し指紋の残る硝子窓
 電線に連雀鯀蛭りかな 札幌 佐々木茂
 牡丹雪広場の鳩の紅き脚
 大鷲の相撃つ輪舞流水野
 頬撫でるわづかな温さ春二番
 水源の薄氷日々に消えぎえに
 空に彫る楔形文字雁渡る
 崩さるる雪像惜しむ人だから
 群雀飛び交ふ一位風花す
 春光や馬のたてがみ風を切る
 白波のうねりとなれり鯀群来
 暮れぎはの光はなさず囀れり
 春光を集め利尻の一番船
 温室のおもての雪の深さかな
 雪どけの道水捌けの簀の子かな
 温室のすみの明かりやひな飾り
 街の樹に芽吹きを捜す万歩計
 小肥りの志功の天妃桃の花
 日を溜めて窓辺に満つるシクラメン
 櫟で抜くる樹林や春登山
 春の雨夜景滲める観覧車
 島崎 洋
 園田 鶴子
 高山 誓英
 竹重 富子
 多田 陽子
 田邊 政代

大白鳥早春の野に影二つ
苞脱ぎて銀を解きたるねこやなぎ 札幌 長田秀行

母の居てこゝがふるさと雛飾る
春泥や生家にいまも渡り板

中鉢弘一

オホーツクの銀嶺遙か鳥帰る
空よりも青を深くし冬の川

八代洋子

雪原に一本道のサイロかな
ミネラルの多き春水咽に染む

横山康博

川へ向く狐の足跡迷ひなし
鯨釣りて闇に光れる鱗かな

江別 太田佳美

大雪野落葉松の影二里続く
造り酒屋太き梁より吊し雛

東根 門脇好子

鈍色の街に一鳴春の雷
磨崖仏肩を濡らして斑雪

新潟 大湊とせ

春立つや如来に古りし千羽鶴
軸替へて梅のお花の眞盛り
三月の声の嬉しさ空の青
おひな様飾りし孫の背の丈

雪来ると顔の活気や峽の人 新潟 佐藤幸示

お年玉掲げて母に走る子ら
初夢に父とへば碁の負け戦

佐藤シズエ

春寒し告知の医師の白衣かな
足止めて傘ゆすりけり牡丹雪

島津治子

恋猫の傷痕深く戻りけり
雪解して道路の白線現はるる

高野松風

春彼岸ハートのクッキー供へけり
狢犬の目鼻をふさぐ春吹雪

中塚滋子

図書館の古代雛の薄明り
風を背に枯草とばす子らの春

燕 渡辺志ま

枝先に張り見ることも寒の明け
堂屋根の反りに止まる春の雪

安久都 登

寒明けと云へど川波風尖る
横ざまにトラック倒す春疾風

宇都宮 安久都 登

合格子紙飛行機を風に乗せ
雪柳胡麻の如きが芽吹きける

福田 弘

雛段のあられつまみにワイン飲む
市民税申告すませ日向ぼこ

寺町の闇をひきさく恋の猫

水切りを競ふ少年風光る

入院の子に手作りの吊し雛
飼ひ鶴の帰る仕草で羽搏けり
禰宜脱ぎし雪駄に春の泥すこし
太鼓の音杜をはみ出す春祭
ピーマンを大好きになり卒園す
雲きれて赤き月食雪の庭
冬天の温き色なる日暮かな
男体山の皖白きまま春一番
遊行柳早や田起しの始まれり
御朱印をいただく土間のあたたかし
電柱の間隔等し山笑ふ
淡雪や水琴窟のよく響く
昨日より今日の青さよ川柳
音もなく沼に膨らむ春落暉
餌を食む放牧馬の背雪しまく
激流の飛沫切り岸凍らせて
凍空に空砲のごと間歇泉
臘梅を一呑みにして鶉の声
雪嶺の薙の深きを鳶高く
山茱萸の花の烟りや空真青
鳥帰るビル乱立に見えかくれ
耕や鋤先に来る尉鶴

芳賀 福武幸子

鹿沼 渡辺利子

栃木 飯塚キミ

上岡佳子

佐野 飯塚満里子

売野 緑

大川政子

下枝より梅咲きそむる古木かな
天城路の初音に目覚む湯宿かな
春浅し干物の並ぶ防波堤
春暁の露天湯栗鼠の見え隠れ
いづこより沈丁の香や六本木
のどけしや空の青きに鳶の笛
恐竜のオブジェが覗く鴉の巢
初午や烏賊焼く煙路地伝ふ
狛犬のガラスの目玉木の芽風
鴨下りる水面一瞬膨らめり
芦野路は風吹くばかり斑雪
橋桁まで飛沫はね上ぐ雪解川
青鷺の佇む中洲蘆の角
菰被りライトアップの寒牡丹
切通し抜けて鎮守や紅椿
春浅き空へポプラの一直線
深呼吸で終はる体操梅ま白
月光や障子を開く雛の間
竹林を巡る小径や犬ふぐり
遠目にもほのと明るき桜土手
薄氷の底に目高のそと動く
青空や八重紅梅の蕊ながし

佐野 木村君子

黒川しげ子

齋藤ミチ子

島田和枝

関口かつ子

高田貴子

店網洋子

風光る駝鳥の尻毛吹かれをり 佐野 永澤千代子

春風に髪なびかせて神参り

福寿草ほつこりほつこり日を弾く

樹の影やばつんばつんといぬふぐり

青天へ真つ直ぐ芽吹く銀杏かな

椿咲く巨岩奇岩の千光寺

蘆牙の競ひ出でたる遊水池

檜山に春子櫓組む阿仁マタギ

岩陰の深みに動かず春山女魚

沼縁に糸のやうなる野蒜かな

木の芽晴沼面ゆるびて空の色

雪残る藩主の墓所の広さかな

噂をかこみ込みたる一樹かな

椿象の背のハートや春うらら

植物園一樹このみて百千鳥

採血の指先冷ゆる我老いし

白さぎの鴉と並ぶ雨水かな

沙羅の木の冬芽の先の丸みおふ

涅槃寺の障子明るし鳥の声

またたく間雲湧くところ涅槃西風

玉椿花びらほどく茶事の床

春嵐病室に母残し来て

和光 板垣陽子

仲山さよ子

松田富夫

茂木弘子

つくば 阿部より子

さいたま 須藤初枝

草加 鈴木清江

はばかり紅梅に顔近づけぬ

部屋中を明るくしたる花ミモザ

あゝ兜太永久の別れの雨水かな

日本武尊祀る奥社へ梅一輪

さらさらと野火止用水春の声

おぼろ夜の夢かうつつか遠ばやし

雪もよひ一粒一粒ポール菓子

せとひひな飾り病室賑やかに

遠足の一回過ぐる蔵の街

梅真白おびんづる様に千羽鶴

母に似る雛がゐたり青昼

雛段の横に展げし貝合せ

能楽師雛の前にて演じけり

紅梅や寺の隅なる遊女の墓

水道の巻物はづれ雨水かな

岬への道を横切る雉一羽

啓蟄や砂場にたむろ園児達

峠道越生の里は梅真白

ケアホーム段々飾りの紙雛

法話聞く兄の忌日の春障子

水戸藩の庭園はいま梅見頃

扁額は藩主の自筆桜東風

新座 多田英治

川越 榎本美代子

岡野輝子

栗田文代

黒木敬子

鈴木アキエ

津金房子

奥御殿の四季の襖絵光る風
行き過ぎて香りに気付く沈丁花

川越 常見イツ子

味噌汁に浮かぶはこべの青青と

武蔵野の空広びろと白木蓮

山下とし子

凍蝶の翅のゆるびて動かざり

遠目にも青麦の畦くつきりと

山本敦子

晴天の富士を背負ひて芋植うる

梅東風や意志を貫き兜太逝く

小林あけみ

啓蟄や朽葉の揺らぐ心字池

蜥蜴出づ庭下駄を占め小半日

坂戸 守山勝江

二ん月の水動かせり鯉の口

ハーブの名美肌草とや春の昼

所沢 南雲秀子

風吹けば空をミモザの染めにけり

湧水のかそけき音や露のたう

喜多恭仁子

皓皓と春満月や立子の忌

紅梅の濃淡きそふ国分尼寺

千葉 大月玲子

春光のその奥にある暗さかな

昨夜の雨ふみ木の芽の耀へる

喜多恭仁子

佐保姫や縄文の森動き出す

空海の書写三十帖春めきぬ

千葉 大月玲子

白梅の上に満月雨戸閉づ

鎌倉の地酒に酔ひし梅見かな

木の芽風赤いベレーのころがり来

千葉 清水美知子

山桜昔土葬の鉦太鼓

雨あがり木の芽ふくらみ輝きぬ

雪解けの気配は見えず鳥海山

父母の背追ひかけて蕨狩

三姉妹揃ひて茶の湯臘月

春天に薨の龍の鱗かな

春の日に透かして選ぶ神籤かな

春の昼大きな欠伸噛み殺す

ピンセット先の金箔冴返る

道の辺を行きし蛙の琥珀色

水音の高まる楡の芽吹かな

防人の碑に薄氷の煌めける

引潮や飛び立ちさうな桜貝

東ね売る安房の菜の花上着脱ぐ

模型機飛ぶ沼の空へと桜の芽

沼まさに凍らんとせり鴨浅瀬

椿落つ梅の花びら敷く上に

啓蟄や綾子歳時記ゆづり受く

春疾風過ぎて夜半の消防車

祭壇に菜の花あふる七年目

佐倉 新谷八郎

佐倉 新谷八郎

有泉正夫

有泉正夫

竹内 實

竹内 實

春嵐畦を繕ふ鋤重し

春あらし醸し育てし土流る

瓔珞をまとふ菩薩の春愁

四街道 釋 勝信

梅の香に野点の碗をつつみをり

啓蟄やずしんずしんと杭打機

裸木に小鳥の影のなかりけり

船橋 入河 大

芽吹く枝風の強さを受け流す

鎮魂の囀りを聞く無縁墓地

墨ふむ筆つややかに春立ちぬ

蒼天に一と刷け白き春の雲

遺されし夫の時計や春刻む

房総の春立つ朝の雪となり

満を持し木々の芽天を突きにけり

槐島 修

路地奥の春のメニューや神楽坂

水仙の白きに衿をたゞしたり

公園に小さき雪の達磨かな

流水来と網走よりの電話あり

春泥や大根持参の友来る

梅満開湯島の縁台赤ケツト

梅まつりお蔭の八重子をふと思ひ

落の葦地蔵の頭巾褪せしまま

囀や明けの明星うすれゆく

宮本加津代

中川泰夫

近藤澄子

槐島 修

内田節子

入河 大

啓蟄や洗濯物の乾きよく

受験生の親校門に溢れたり

目刺し差し柵飾る小路かな

小雪降る京都の町の子マラソン

一日を閑居の中や春時雨

嬰の手に指にぎらるる桃の花

転勤の告げられし朝春の雷

片頬に触るるや消えし春の雪

春の雷暴れだしたる夜明け前

春の雨駆けこむ縄文住居かな

海に向きふらこここぐや老二人

沈丁花袋小路に匂ひけり

アルジェへ行く吾子を送るや福寿草

藁を燃すことより始む春の野良

小流れに芹洗ひつつ商へる

棧埃にはかに目立つ春障子

仕舞ひ込むものみな広げ春日和

囀りの見え隠れする忘れ水

追悼の深く静かに辛夷咲く

宙吊りの玻璃拭く影や風光る

春の川空を映して流れゆく

つくづくと金柑の種うとましき

船橋 吉原千恵

柏 鹿毛満子

松戸 石川幸子

菊岡緋路

野田成夫

市川 奥澤よし江

東京 石井登女

日だまりの畑すみ二つ落のたう 東京 石山風童

夕暮れのたなびく雲や梅真白

苗畑に雀降りくる雨水かな

積雪の梢さまざま流れ雲

掻い掘りの杭に白鷺動かざる

せせらぎの音のやさしき芽吹きかな

梅が香を纏ひて佇てり東湖の碑

飛石を跳んで女生徒花菜風

春禽や百八段の男坂

何も無き空に辛夷の蕾満つ

おつまみは酢味噌絡まる螢鳥賊

卒業の子等饒舌に街歩く

還らざる北方領土鳥雲に

日蓮の洞穴に垂る春氷柱

横丁のアニマルショップの亀鳴けり

観潮船金の鍵投ぐ渦開き

動き出す白帆や湾の水温む

あやふやと風にあらがひ初蝶来

京都より着きし漬物春炬燵

桃の花便りはいつも母にだけ

天神のをんな坂より初音かな

春よ来いローズピンクのランドセル

岡村純子

北口富栄

桑原優美子

小池宗彦

下嶽孝一

鈴木光正

田崎京子

境内に小さき木戸や梅香る
一人居の部屋に七段古雛

青空に触れ眩しかり梅真白

たんぽぽに屈む親子や空晴るる

草萌を子犬と走る三歳児

足伸ばし山菜萸の花見に行きぬ

うららかや胡坐かきたる羅漢さま

知らぬ歌ばかりとなりぬ卒業歌

パンダ見んと長蛇の列や寒桜

公園に浮世絵行灯春立てり

金粉を浮かぶる朝茶初音かな

対岸の翳りに群るゝ残る鴨

たんぽぽや三日見ぬ間の利根堤

紅を差す夫の遠忌や桃の花

恋の猫窓辺で爪をときゐたる

正座して子等と歌へるひなまつり

合格子中学校まで走りゆく

路の塵揚げて油の濁りなく

いつの間に空き家か梅花散りしまま

独り居の庭にいつまで浮かれ猫

吹く風の尖りのとれて春近し

大風の春引き連れて到来す

東京 田中明子

中澤桃子

中ノあさ子

長谷川信也

長谷川はるみ

東 順子

本多 葵

震災忌手向けの花か梅の舞ふ
初音して一瞬音の無き世界 東京 松本幸男

黒船の着きし岬や黄水仙

梅一輪安堵の光る思ひかな

よそゆきの挨拶する子雛祭り 武蔵野 砂地宏子

沈丁花夜風のままだに漂へり

紫陽花の固き若芽の吹きいづる
沈丁の香をもたらせり誕生日 国立 阿部幸子

春昼や路面に遊ぶ尉鶺鴒

清清し朝餉の汁に落のたう

ある色の座牛の鼻のあたたかき 日野 渡辺八枝子

目鼻なきとろけ地蔵や春一番

語り部の木綿ちぢみや草の餅

催花雨や山河一氣に動きけり 八王子 栗原紀美

クリスマスローズどの色も思索かな

蠟梅の匂ひ立ちたる朝の風

雪折れの水仙供花に余寒なほ 町田 桔梗 純

蓬生ふる日溜りに来て猫の伸び

久々に姉の笑顔や雛飾

大櫓の高きを映し水温む 横浜 阿部トキ

春塵や少年拭ふマリア像

大地主庭半分に落の莖

陽の当たる枝より開く寒紅梅 横浜 大久保義和

枝垂れ梅流るる如く花つけぬ

観梅会下草に敷く緋毛氈

花と紛ふ木の芽かぐはし雑木山 岡田 幸吉

落のたう祠に古りし不動尊

花すみれ山路の夕日ほしいまま

白梅や佇む人も寡黙なり 奥野 周光

たはむる番の目白木瓜の花

外国へ嫁せし娘の雛かざる

逝かれたり紅を散らせる寒椿 後藤 晴子

いつまでも続く遠吠春寒し

囀やオムレッツとろり焼き上がり

嘴を洗ふ鴉や秋の池 柴田 雅春

靴底に確かに触るる櫟の実

銀杏の梢にあまた空真青 長野 高朋

ご神木かおと一声初鴉

寒梅の緋の一輪や天神社

買初や期待半ばの宝くじ 川崎 横山ユキ子

艶やかな獣の爪めく木の芽かな

春の雪払へばバジル香を放つ

春蘭の咲きしと父の呼びし日よ

荒れ果てし廃校の門山桜 藤沢 湯浅政男

磨崖仏にうすべに添ふや山桜
娘きて襖に替へて春障子

茅ヶ崎 久保田富士子

春一番オランウータン動かさる
春日和壁の天女が笛を吹く

静岡

高橋一夫

風やはしじやが薯植うる土匂ふ
しやぼん玉諸手上げたる幼跳ぶ

大和 中谷由都

探梅や走り根を踏み谷渡る
鬼と記す板戸打ちをり節分会

新川澄子

「吉」浮かぶ水占ひや温む池
薄桃のつぼみほぐるる甘雨かな

江口嘉郎

花蚕豆株の根元に力あり
蒲公英のびたりと土に張り付けり

本多ひとみ

夕闇に光帯びゆく春の月
八ヶ岳風幣の千切るる道祖神

甲府 江口嘉郎

初日の出海原染めて雲染めて
冬うらら石仏の目のほほゑみて

望月知恵子

ピアノ弾く三月の窓開けられて
幹に影地に影さくら母と子と

静岡 石川裕子

保健婦の元気ですかと声ぬくし
寒波来る水道管の唸りゐて

望月ゑい子

ときどきは風にうなづく桜かな
産月の検診の子へ春シヨール

岩崎武士

ちやん付けで呼びて呼ばるる女正月
着ぶくれて月食仰ぐ杣の宮

餌台に追儼の豆をひと握り
建国日古地図に笠屋簷屋

岩崎武士

落武者の隠れし祠年の豆
洗ひ桶氷離さぬ空模様

矢野喜久江

空谷にチェーンソーの音春きざす
残る鴨水輪に水輪重なれり

興津千鶴子

よく見れば古墳のすその重かな
春一番下校の子らの帽子とぶ

枝垂梅こぼさぬやうに神籤結ふ
馬鈴薯植う一步一步と穴を掘り

杉山 明

春めくや友にさそはるフラダンス
下萌や板一枚の橋しなふ

吉野美智子

自転車に菜の花揺らせ修行僧
茶畑の囲む禅寺初音かな

杉山 明

潮の香や防風林の若みどり
ふる里の小川飛び越す春シヨール

巻き皺のつきし寝釈迦の衣かな 瀬野喜代子

小雨降る午後の医院の押し絵雛

恙なく過ぎて夕日の霞みけり

積る雪弾く若木の粘り腰 金沢 白村喜久代

如月や深夜の冷えのこめかみに

寒明くる山里に立つうす煙

寒鳥羽搏く硬き音残し 道場啓子

渦べりに座し白山の遠霞

木の芽風渦の遠くをカヌー行く

島影のまたもや過ぐる春障子 西田たかこ

みささぎの濠へ畦焼く煙かな

備長炭鳴らしつ売れり梅見どき

雨宿りせよと老舗の雛飾 西田秀子

戻り来を再び放つ流し雛

朝日さす紵の森の囀よ 白山 朝倉みゆき

雪襖スコップ握る血豆の手

朝の日にほころび初むる玉椿

春のひよ枝に弾みて群れ遊ぶ 鶴尾正江

涅槃図や生かされゐしと跪く

比咩宮の芭蕉の句碑に春しぐれ

雪に耐へ山菜萸みごと走り咲く

さくら餅売れる姉妹の加賀ことば 堀井 中石紀美代

宿場町切れ長の目の古今雛

黄水仙囁の道に丈揃ふ

おぼろ夜や易者の被る黒頭巾 大田ふじ枝

土掘つて出でし地虫の手に踊る

囁みち萌黄明るき露のたう

モネ展へ心膨らむ春シヨール 川口和代

草原に二胡のひびくや春北斗

日能忌櫓の花のほころびぬ

身を賭してしぶく岩場に海苔を搔く 茂山暉子

独り居や追儼鬼さへ友に欲し

観梅やうぐひす張りの廊踏みて

梅東風や日暮門の檜皮葺 中川雅月

酒蔵の大甕に盛る猫柳

狛犬の薄氷しかと踏んぱりぬ

雨雫きらりとこぼし枝垂梅 倍野喜代子

まだ固し緑の浅き露のたう

春を待つ顎まで沈む薬風呂

春二番ゆるむ庭木の吊し縄 前川千代枝

山祇の大樹の浮根蜥蜴出づ

ゆるやかに城浮き上がる春霞

春日差し波の耀ふ琵琶湖かな 山本一枝

鯉浮上春の息吹を吐き出せり

剪定の音弾みをり空の青
紙雛にすしめし飾るよき日かな 敦賀 吉川禮子

実千両珊瑚色して透き通る

初音きく好天続く琴の町

雪解川日に日に太る峽の村 吉田紫火

卒業子顔は見せずに訪欧す

春泥と言ふ美しき名の泥落す 御坊 清水勝子

春寒やここもあそこも家毀つ

陽春の淡海鳥居は湖に立つ

四温光マトリョーシカの薄埃 大阪 入山繁幸

尾根づたひ発電風車山笑ふ

単調なレールの響き目借時

梅の香に酔ひ牟婁の湯に浸る宵 明石 前島 幸

春一番夜の海峡吹き抜くる

軒先の雪解雫や今朝の晴

春疾風入江の潮の渦巻ける 徳島 平岡 功

春の夢鳥獣戯画の話し声

回想の果てなき夜や亀鳴きぬ

断崖に碎くる怒濤藪椿 宮西修一

斎垣に通ひ路あり猫の恋

小米花猫のしつぽのこぼしゆく

春光や紙飛行機の宙返り

園児らの坐りたる庭蝶の昼 石井 高月 巖

山に水奏でてをりぬ椿園

溜池に大魚現れあたたかし

あんまりな太さホテルの恵方巻 小松島 岡田あゆみ

山火立つ影絵のごとき寺の塔

神苑の積もる枯葉に鹿眠る

悩みしこと小さく思へる春の空 田上幸子

遠足やトンビの笛を下に聞く

鳥声の明るし朝の春障子

善哉をふるまふ春の文化祭 福岡 園田清子

梅日和なじみの店の塩むすび

絵に描くと竹かごに盛る春野菜

春昼や水音のほか消え失せて 古山みどり

河口堰まで春潮のふくれくる

家々に梅咲いて人影のなし

深々と母に一礼卒業子 那珂川 高山ひさ子

水温む今朝は洗顔念入りに

連弾の母と娘やチューリップ

貝殻の窪みにたまる春の雨 西海 山下敦子

磯の口開きて村中海女となり

朧夜や鉄橋を行く貨車の影

うりずんや十字架を打つ鎚の音 那珂 謝花寛営

抗議デモ列の真上を春の雲

ルカ書伏せ春満月をあふぎけり

旧正の鯛の落雁漁師町那覇砂川道子

伊良部大橋霞の海に龍のごと

岩壁の揺らぐ池水や島あざみ

雪風巻くビル横面に容赦なく札幌吉田克己

防雪林限無く続く北帰行

寒九の水身体堅固祈り飲む新庄曾野部礼子

雞街道俄に出店賑はへり

青き籠箆を並べて雁木市新潟倉田松仙子

かんじきの跡のついてる供養塚

斎藤ヨシ

豆を撒く小聲に鬼の笑ふかな

榊原キヨ子

臘梅のひそと咲きをり潟の風

花村ヨシ子

神木をかすむる鴉深雪晴

三谷愛子

空き部屋に埃の目立つ寒の明け

稲川清子

野水仙暮れどき強く香を放つ

小林元子

水嵩ます溪のしぶきに沢桔梗

小林元子

二つ三つの柚子と遊べる長湯かな

小林元子

鬼やらい鬼も今様長き脚

小林元子

登下校マスク眼鏡の杉花粉芳賀

小林元子

回覧を届け見つけし露のたう

小林元子

駐在所赤いランプに小雪舞ふ

小林元子

下校の子春泥とばし走り行く

コルセットはめて雪掻く翁かな芳賀塙 テル

いちご柄の地域起しの吊し雛

浅き春軒に長靴日に晒す真岡上野恭子

走り行く子等の靴音春兆す

雪晴れて今咲き初めし水仙花佐野磯貝綾子

犬逝きて六年になる雪の空

山裾の手作りパン屋椿咲く

春風ややや短めに髪を切る

遅き日や校舎越えくる球児の声

吹き荒ぶ杜の寒禽騒騒し

紅千鳥てふ椿にも指触れて

風光るパンパスグラスの穂先揺れ

兜太逝く秩父連山田螺鳴く千葉高田みや子

木の芽雨夜半の咳なだめをり

カーテンを少し開ければ紅椿佐倉杉田富美代

檜皮葺き霜一面の社殿かな

霜の上いつの間にやら散椿

辛夷の芽太鼓響かせ雷電祭

花見酒吞まずに逝けり呑み仲間四街道後藤誠二

木の芽食ふ鳥を見上ぐる猫陰し

連れそうて補ひあうて寒菫柏村田由美子

回復の夫へ八つ切冬林檎

内堀に朝日かがやく都鳥

松戸

渡部洋子

三日月も街もおぼろに際見え

立春の日射しやはらか猫車

東京

赤松わ子

巫女走る紅き廊下や春の風

竹林を透かし清しき梅の花

大き瘤育み古木早や芽立つ

啓蟄や母のゆびぬき不意に出る

沈丁花今だからこそ言へること

地に散つてここにをります花櫛

春の猫額を膝へ当てに来ぬ

庭園は日の匂ひして雪化粧

年長児部屋から聞こゆ卒業歌

木蓮の蕾膨らみ深呼吸吸

春光を背中いつぱい読書時

連風の揚がりきつたる父の顔

当選の家庭菜園地虫出づ

下向きの日々にさくらの便りかな

励ましの電話友より春の夕

霞立つスカイツリーの避雷針

東京

中山岳夫

啓蟄や長養生で文字忘る

紅白の花びら散り敷く梅日和

西村サカエ

朝の陽をはじき返して連翹咲き

ジオラマの如く魚沼冬景色

東京

平子甲奈

煌々と圧雪車輛の夜伽かな

一面の菜の花淡し浜離宮

福田ふみ子

嵩上げの土何処より犬ふぐり

白壁に冬木影ひく田安門

藤田信子

春一番結婚式への招待状

荷下ろしの黒の軍手に春みぞれ

松井宣夫

柳の芽ガードレールに届きをり

雪解風吊橋長く富士迫る

松野寿美代

折紙の犬を並べて窓うらら

硯あけ寒九の水に筆おろす

宮川昭子

柚子たわわ住まぬ屋敷の明るくて

たんぼぼの絮ころげゆく岩畳

宮脇秋峯

大広間 嬬夜業の吊し雛

梅林の土黒々と土竜塚

府中

竹村晃子

山里や古雛おはす蔵灯り

枯葉舞ひ雀のごとくころがりぬ

国立

南場雅子

春光に竹林の青輝けり

啓蟄や幼児柵をすり抜けて

町田

井上篤子

引き鳥や一羽木移り群続く

早春の踏み出すやうに明王像

横浜

大駒泰子

切張りに五弁の椿春障子

パンジーの目と鼻模様黒々と 横浜岡 元枝

春雨や墓標の文字の浮き上がる

美濃和紙の灯りほのかに古雛 坂本具子

古時計時を刻みぬ土雛

そぞろ寒妻とラーメンする音 佐藤正美

しみじみと霜夜の祖母の子守歌

まんさくの花の香りを運ぶ風 鈴木律子

榛の花風に富士山浮き出して

厄詣はやばや済ませ縄のれん 富田 要

彼岸西風祖父のステッキ突いて立つ

枯芝の芝の中より新芽出づ 正木喜美代

夕食や潮の香高きあさり汁

早春の秩父の空へ兜太翔つ 豊 美佐子

雪搔きを夢で聞きをる朝かな

年女背中丸めて福は内 若林昌子

春光や赤児の手足のびのびと

春暁のベッドに励むストレッチ 川崎 青木明代

春や春天才少年棋士現るる

積もらぬとごちて爪切る春の雪 大久保 進

古草や初見参の孔子像

穏やかに春満月のうるみたる 高野翠子

春めくや普請の音の近くなり

白梅や窟の多き鎌倉路 川崎 安田良子

歴史館出て足元に露の蝨

梅目白双眼鏡に溢れたり 鎌倉 佐藤千晴

ロイヤルとは芯まで染みし冬莓

紅椿母にも忘れられぬ人 伊勢原 長嶋和子

大山の懐深く斑雪

氷張るバケツの掴む空の青 山本カツ子

野遊びや光はじける畦を踏み

白梅や兄弟ゆかりの曾我の里 桑野 秋山憲三

朱の苞を着替へて青き冬芽かな

大雨の止んで初音の届きたる 松田 古谷悠紀子

山茶莢の花ほつほつとバター色

挨拶をくるる少女や黄水仙 小田原 河野貞夫

雨上り一斉蜂起のつくしたち

引く白鳥田に群れ居りぬ風の中 松本 藤森利子

雲の帯流れる城下寒の月

花の中頻りに鳩の頭の動く 静岡 西村まさ

白梅の散りて残れる香りかな

日溜りに顔を舐めをり春の猫 望月敏男

湖を風の渡れり初蕨

春一番整へし髪打ちくだけ 伊東 阪根征矢子

ジェット船櫓の島へ二十分

裏山に露のしうとめ太りけり

焼津

小梁洋子

桜咲き土手に子どもの声弾む

木の芽風ハーモニカ吹く調べかな

金沢

石川純子

涅槃図へ足音消せる緋毛氈

椿咲く誰も通らぬ裏道に

北野陽子

見上ぐれば夫も見てゐる春の月

竹林に折れ裂くる音春疾風

河野尚子

川底の雑魚動きある四温かな

断崖に楽譜のやうに土筆かな

高木艶子

独り居の早き夕餉や雛の間に

田の中をつつくほじくる冬の雁

田上ナツ子

冬の鳥一瞬の影こぼしけり

幼子も雪を詰めをり氷室小屋

廣田宏美

苦学せる父の話や雪しんしん

塔の際とぼとぼ来たる恋の猫

水上依乃

拍手乞ふ大道芸や春の夕

涅槃絵の色鮮やかに寺座敷

宮崎恵美

ふくらみつつ落つる点滴日脚伸ぶ

馬の背を歩くがごとき雪の道

保田ひろ

消火栓照らす外灯雪しんしん

利休梅枝折れしまま芽吹きたり

谷内瑞江

牧跡の柵の顔出す雪野原

一刀彫りの円空佛や美濃の春

敦賀

伊上はるゑ

軒つらら怯ゆるほどの尖りかな

朧夜に灯ゆらめく風生忌

内池宏行

妻の声仏間に聞きし涅槃西風

檜の木の芽吹きはじまる峠みち

若狭

藤原玉泉

白魚を躍り食ひせる舟の上

髪結ひて春立つ街へ出かけたり

徳島

林 早苗

泣き虫の男の子早くも一年生

雪霏々と世界平和の灯がとる

山本晴美

寒晴れのメダル獲得待つてをり

白梅の枝垂るる句碑に影生まる

山本瑤子

風花の遊ぶ校庭チャイム鳴る

手の甲のひび蠟のごと生身魂

石井

木内マヤ

生き死にに慣れたくないな桜餅

孫からのバレンタインチョコ苦かりし

福岡

石原好宏

博多の街に残る寒さとなりにけり

バス停の梅を過ぐれば海となる

相本和子

雛の日すべて蕾の枝を求む

万象作品の佳句

飛 高 隆 夫

モダンなる古墳の壁画鳥雲に 横川 良子

高松塚古墳の壁画だろうか。あの天平時代風の美人図は、たしかにモダンな感じがある。あるいは、他の古墳の抽象画とも思える線描の図だろうか。いずれにしろ、時間性と空間性を含み込んだ、「鳥雲に」という季語の配合が見事である。作者は佐倉の人。

料峭や齒こぼれの鍬研ぎし手に 澤 照枝

料峭は春風が肌に寒く感じられること。春の耕しの準備として齒こぼれの鍬を研ぎ上げる。濡れた手に春のまだ冷たい風が吹き寄せる。その冷たさが農事の季節に向かう心をひき締める。風土性の滲む句。作者は土浦の人。

見まほしき高尾の山の白董 喜多尾明子

高尾山は東京都八王子市にある山。標高五九九㍎。東京近郊の行楽地として親しまれている。高尾山に白董の群落でもあるのだろうか。作者はその話を聞いて、「ああ、見たいなあ」と思ったのである。「見まほしき」という率直な物言いが

好ましい。作者は日野の人。

補陀落の沖へ沖へと離流す 塗木翠雲

補陀落は補陀落山。南海上にあるという観音菩薩が住む山。往生または参詣する目的で出船する補陀落渡海が中世を最盛期として行われた。茨城県から鹿児島県の太平洋側に痕跡があるという。補陀落渡海に離流しを重ねた行事がどこかにあるのだろうか。あるいは作者が、海辺の離流しに補陀落渡海を想像したのだろうか。いずれにしろ読者の想像力を刺激する。海辺の離流しの句としては、細見綾子先生に「離流し沖に白浪立つが見ゆ」がある。作者は四街道の人。

開け放す菜の花越しの瀬戸の海 杉浦 一子

旅先の宿の硝子戸の中から、外の景色に目をやった作者は、思わず硝子戸を開け放っていたのである。そこには、明るい菜の花畑があり、さらにその向こうに、穏やかな瀬戸内海が広がっていたので。旅先の感動が簡明に詠まれている。作者は東京の人。

月光の照らし出したる寝釈迦かな 宮田千恵子

寝釈迦は涅槃像。お釈迦様の入滅（死）のお姿を絵図や彫刻に表したものの。この句には、月光と寝釈迦像きり描かれていない。置かれている場所も、絵図であるか彫刻であるかも分からない。読者はさまざまな場面を想像して味わうことに

なる。作者は福岡の人。

苗床の苗の穂先の滴かな 丸本祥夫

苗床に幼い苗が勢ぞろいしている。雨の後であろいか。水やりの後であろいか。その幼い苗の穂先に水滴が宿り、きらきら光っている。まるで苗のよい成育を約束するかのよう。小さな生命の輝きである。作者は長崎の人。

鉄厚き防空壕や犬ふぐり 繁田たけ子

第二次世界大戦の末期、連日連夜の空襲に備えて、各戸で庭隅に防空壕を掘ったものである。あるいは鉄板で、あるいは木材を巡らせて。この防空壕は、当時のものが地下倉庫などに転用されて今に残るものか。あるいは回想か。いずれしろ、犬ふぐりが可憐である。作者は静岡の人。

噂の昂る村の目覚めかな 光岡れい子

夜明けが近づくにつれ、村のあちらの森、こちらの林、また木立ちや木々から、小鳥たちの噂が次第に昂ってくる。夜が開けきるころにはすっかり小鳥たちの天下である。大きな情景をしっかりと表現している。作者は益子の人。

鍋と釜ぶつかる音や寒戻り 佐藤嘉洋

「寒戻り」は「冴返る」の副季語として歳時記に載る。春めいた頃にぶり返した寒気をいう。台所で家人の立てた鍋と釜

のぶつかった金属音に、作者は一瞬の寒気を覚えたのである。感覚のよく働いた句。俳句の種は日常のどこにでも転がっている。作者は秦野の人。

以下、三句組から

飼ひ鶴の帰る仕草で羽搏けり 福田 弘

折から鳥たちの北方へ帰る季節。飼ひ慣らされている鶴の羽搏きに、ふと帰ろうとする意思を感じて、哀れを催したのである。作者は宇都宮の人。

電柱の間隔等し山笑ふ 飯塚きみ

山にも春が来た、と改まった思いで見やると、尾根伝いに等間隔に、電柱が連なり走っていることに改めて気が付いた。気が付きのし直し。作者は佐野の人。

皓皓と春満月や立子の忌 南雲秀子

星野立子は虚子の次女。明るくしなやかな句風で、俳誌「玉藻」を創刊、主宰。昭和五十九年三月三日没。この頃は春まだ浅く、月もまだ色を持たず、満月も白く眩い。作者は所沢の人。

雨宿りせよと老舗の雛飾 西田秀子

老舗の陳列窓の雛飾が、立ち寄りなさいと誘っている。折からの雨であるが、傘を持っていても雨宿りしなさいと誘っている。作者も実は誘われないのである。作者は金沢の人。

三月の同人句会は、三月二十五日に行われました。句会の冒頭、同月二十日に亡くなられた、三澤いつ子さんを追悼して、三十八名の出席者全員による、黙禱が捧げられました。桜の開花宣言のあったあとの、暖かい日曜日でした。

初蝶の草の高さをなぞりをり 奥 太雅

「初蝶」が草丈に合わせて、高く低く飛んでいる。その姿を「なぞりをり」と感じた。対象を良く見て詠んだ、写生の句。

初花に雪のかむさる別れかな 小林愛子

三澤いつ子さんへの追悼句。別れの日、茅ヶ崎方面は雪になった。その雪が、咲き初めた花をしぼませるかのようにな、花にかむさって降っていた。その情景を、見事につかみ取っている。

緑蔭に北ベトナムの機関砲 江見悦子

「緑蔭」という平和的な情景の中に、戦争で使われた「機関砲」が放置されていた。戦争と平和の融合というか、その取合せがおもしろい。「機関砲」という物の存在感が強烈。

ささくれの波真つ向に蘆の角 山本右近

「ささくれの波」が新鮮。震えているような細かな波をこう表現した。波のありようをうまく掴んでいる。この波を正面に置き、「蘆の角」と取り合わせた。生命の輝きを感じさせる。

天狗党争乱の山嵐揚がる 谷田部 栄

幕末の「天狗党」事件を取り上げたのが面白い。「山」は筑波山。社会性のある句。春の季語の「風」が、新鮮に配置されていて、印象的な句に仕上がっている。

(以上内海良太主宰選)

老いてなほいのちとたのむ花見酒 山田春生
「老いてなほいのちとたのむ」で、深刻な句かと思つたら、いきなり、「花見酒」。拍子抜けというか、おかしみのある句に。この辺が俳諧。上と下のどんでん返しが面白い。

春風に九条のビラさらはれる 松原三枝子

「九条」は、戦争放棄を謳った憲法第九条。その重たいことが書いてあるビラと、「春風」という、やわらかいものとの対照が面白い。

日のひかり昨日より濃し花ミモザ 原田しずえ

「花ミモザ」は、太陽のひかりととても良く合う花。「昨日より濃し」と云って、一日、一日、春が変わっていく感じがよく表れている。「昨日より濃し」がとても良かった。

(以上小林愛子副主宰選)

磴百段登りきつたる初音かな 須賀 允子

お宮さんの男坂だと思ふ。高い百の石段を上り切ったところで春を告げる鶯の初音を聞いた。「初音」がよくきいている。

初蝶の勢ひ眩しき喪の帰り 吉中愛子

喪の帰りに、初蝶が勢いよく飛んでいる姿を眩しいと感じた。「初蝶」は生まれたばかりの生の姿。「喪」は死。生と死の取り合わせ。この対照が、この句のポイント。

句ひ立つ一畝ごとの春の土 小林珠江

「春の土」が句ひ立ったという、耕しの瞬間の景を、「一畝ごと」と捉えたのが、作者の発見。

(以上山田春生顧問選)

(三屋英俊)

芳子先生を偲んで 「季節風」春の花吟行

「季節風」の春の花吟行は、三月二日(金)に、前日の暴風雨が嘘のような青天の下、二十七名が参加して、静岡市の安倍川中流右岸の葵区遠藤新田の河津桜と、中ノ郷の江戸時代から続く庄屋の鈴木邸を訪ねた。



遠藤新田は、現遠藤家の祖・武田氏出自の遠藤五太夫の開発した新田で、新東名高速道路の通る山肌に一帯を見渡すように代々の墓が並んでいる。

この地の河津桜は、平成十七年三月に、静岡市が政令指定都市となるのを記念して植栽されたもので、開花が早く、地区の名にちなんで「美和桜」と呼ばれている。

安倍川を渡る車窓から、雪の富士山を眺めつつ進み、満開の河津

桜の並木に迎えられた。下流の乗馬クラブの馬場へも足を伸ばした。句会場の鈴木邸では、長屋門や蔵、庭園を散策し、十三時三十分から十五時三十分まで句会。

各同人の選評があり、神田美穂子会長は、「今年は、写生を基本にフレッシュな(新鮮な)句作りを」と述べられた。曾根満副会長は、「吟行は、よい句に巡り合える場で、今日はたくさんのよい句があり元気をもらえた」と締め括った。

(藤原千代子)

山を負ふ庄屋敷や芽吹き急
初蝶の黄なり庄屋の飛び石に
ものの芽や梯子の掛かる子らの基地
梅の花雲母硝子に歪みをり
三月の輝き馬を走らす
調教の馬の蹴り上ぐ春の土
足を組むごとき走り根春めける
花の道こよなく晴れて歩の樂し
遠嶺の丸み増したり水温む
用水に落花一片流れ行く
せせらぎへ桜千本枝を張る
花の中しきりに鳩の頭の動く
ときどきは風にうなづく桜かな
餌食ぶる馬の鼻息風光る
木瓜の花蔵に置かれし罌の箱
春光や大河に沿うて馬駆くる

神田美穂子
曾根 満
藤原千代子
宮崎みゆき
荻野加壽子
大長文昭
加山ひさ子
小梁洋子
吉野美智子
繁田たけ子
富田キヨ
西村まさ
石川裕子
高橋一夫
岩崎武士
杉山 明

同人会会長に就任して

柳 澤 宗 正

この度、内海良太主宰の推挙により、「万象」同人会会長に就任しました。身に余る大役ですが、四月の同人会総会で選任された吉中愛子幹事長、古川京子副幹事長、奥太雅会計幹事他の新役員と共に、今後任期の三年間一丸となって万象俳句会と連携しつつ同人会及び万象俳句会発展の為、左記の課題に取り組んで参る所存です。どうか皆様の一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

一、同人一人が一年間で会員一人を増やす。創刊時に比べ半減している会員数の減少に歯止めをかけた。

二、万象俳句会への財政支援(今年度は三十万円)。寄付依存を減らすため、「万象」誌発行費用の削減が喫緊の課題。

三、同人会総会の開催時期、在り様の検討。ここ数年出席率が四割台に低迷。全国俳句大会への合流も一案。

四、「中山純子記念俳句賞」の新設。主宰の提案で同人会が主管し、今年から実施する。別途、「万象」誌に掲載予定。

五、その他(同人名簿の見直し、同人会規約の改正等)

必要に応じ幹事会を開催し、意見の集約を図っていききたい。なお、永年の功労に報いるため、福島せいぎ前会長に胡蝶蘭を、内藤恵子前幹事長には功労賞として三万円を贈りました。(その後、福島せいぎ様は十万円を同人会へ、内藤恵子様は三万円を万象俳句会へ寄付されました)

以上

珈琲タイム

17

【問1】子規の俳句です。空所を埋めましょう。

1. やローンテニスの線の外

ア 秋草 イ 山茶花 ウ 蒲公英 エ 緑蔭

2. フランスの を封す書信かな

ア 桜 イ 菫 ウ 薔薇 エ 紅葉

3. を綺麗な風の吹くことよ

ア 小春日 イ 三月 ウ 春の夜 エ 六月

4. 机上の白紙飛び尽くす

ア 青嵐 イ 風や ウ 春風や エ 虎落笛

5. やベースボールの人遠し

ア 寒林 イ 黄落 ウ 夏草 エ 春めく

6. 鶏頭の にそそぐ時雨かな

ア 紅き イ 重き ウ 固き エ 黒き

【問2】夏の動物の季語です。読み方を答えましょう。

1. 守宮 2. 杜鵑 3. 水鶏

4. 鱧 5. 金亀子 6. 蛞蝓

【問3】清記は正確に！一字直して校正しましょう。

1. 夏草に延びてからまる牛の下 高浜 虚子

2. 筍を三日くらひて飽きざりき 石田 波郷

3. 田を植へて空も近江の水ぐもり 森 澄雄

4. やす扇ばりばり開きあほざけり 高浜 虚子

(解答は本号の『東西南北』のページにあります。)

「万象」中央句会三月例会

平成30年3月3日
東京文化会館33名

内海良太主宰選

九十九里の蛤じゆわと身を晒し
春暖の壺に納むる喉仏
春満月夕戸朝戸に愛でにけり
残雪に夕日かがよふ雲巖寺
沼縁に糸のやうなる野蒜生ふ
剪定の枝にいらがの藺堅し
春雨や豆と染め抜く紺のれん
二月尽爆弾低気圧も来て
手載り雀の軽きに遊ぶ雛の日
石文に和魂漢才梅真白
わが墓となる石にのる春の鵲
病む妻の鎖骨の窪の雛あられ
爪先の草履のしめり麦を踏む
建国日未だ冷めやらぬ西の島
人減つて道新しき茨の芽

飛高隆夫選

雛まつり嵐のあとのよき日和
ポピー摘む鯨の海を目交に
風光る不忍池浚ふ筏乗り
ことごとく裸木光る雛の日

加賀葉子
小池宗彦
奥太雅
増田幸子
茂木弘子
奥太雅
南雲秀子
飛高隆夫
増田幸子
水野加代
原田しずえ
中村千久
赤松郁代
長谷川信也
吉中愛子
内藤恵子
内海良太
草間三香子
田中道江

江見悦子選

春暖の壺に納むる喉仏
あやふやと風にあらがひ初蝶来
雛の間とおぼしき障子明りかな
接岸の舟ひとゆらぎ芦の角
伐採の匂ひ重たき雨水かな
石文に和魂漢才梅真白
蔵町の空高々と鳥帰る
染まるもの桃色に染め春夕焼
噛み切れぬいぶりがつこや春炬燵
臘夜や欣一兜太同い年

「万象」同人句会三月例会

内海良太主宰選

初蝶の草の高さをなぞりをり
初花に雪のかむさる別れかな
緑蔭に北ベトナムの機関砲

内藤恵子
草間三香子
増田幸子
中村千久
赤松郁代
内藤恵子
小池宗彦
下嶽孝一
谷田部栄
谷田部栄
草間三香子
水野加代
原田しずえ
中村千久
谷田部栄
原田しずえ
奥太雅
小林愛子
江見悦子

平成30年3月25日
俳句文学館36名

無機質の触れあふ音が白あせび
ホーキング亡く春星の潤みたり
菜の花や橋の向ふに橋かすむ
ささくれの波真つ向に蘆の角
喪婦りの真上に青き春三日月
十津川の名もなき高き山笑ふ
芽柳や浮棧橋のずれてをり
春風に九条のピラさらはれる
天狗党争乱の山風揚がる

小林愛子選

ふた流れひとつに太く雪解川
老いてなほいのちとたのむ花見酒
緑蔭に北ベトナムの機関砲
花辛夷畑を深く掘り返す
しんがりにゐて聞きとめし初音かな
子規球場に靴跡深く春の泥
切株の土に還る辺路の墓
涅槃西風土あたらしきもぐら穴
春風に九条のピラさらはれる
日のひかり昨日より濃し花ミモザ

山田春生選

ペランダの鉢に砂浴ぶ雀の子
鳥一羽離れて雲に犀星忌

松原三枝子
赤堀洋子
山本とく江
山本右近
内田郁代
赤松郁代
赤堀洋子
松原三枝子
谷田部 栄

中村 弘
山田春生
江見悦子
水野加代
谷田部 栄
藤田裕子
松原三枝子
須賀允子
松原三枝子
原田しづえ
加賀葉子
三屋英俊

春落葉踏みて尋ねる綾子句碑
礎百段登りきつたる初音かな
初蝶の勢ひ眩しき喪の帰り
句ひ立つ一歟ごとの春の土
土雛や佐渡の流人が作りしと
火渡りの火の粉飛び交ふ柳の芽
下総の低き山脈鳥雲に
天狗党争乱の山風揚がる

山本絢子
須賀允子
吉中愛子
小林珠江
谷田部 栄
原田しづえ
山本とく江
谷田部 栄

▽中央句会 6月2日(土) 東京文化会館 午後1時より
▽同人句会 6月24日(日) 俳句文学館 午後1時より

万象基金のご報告

内藤恵子	一五〇口	匿名	五〇口
原田しづえ	一五〇口		
万象同人会	一五〇口		
芝宮留美子	五〇口		
小林 馨	一一口		
倉田松仙子	五〇口		

(平成30年4月2日～4月23日現在。受付順・敬称略)
ご協力に感謝申し上げます。
「万象」発展のため、大切に
使わせて頂きます。

万象俳句会

東 西 南 北

消 息 等

第十一回「万象」神奈川県支部吟行会

4月23日、横浜の神奈川労働プラザで開催された。内海主宰、小林副主宰、江見編集人他、東京からも7名が参加し、計42名の賑やかな会となった。詳しくは7月号に。

飛高隆夫万象作品選者の句、「春耕」5月号に「万象」4月号発表の「山茶花を咲かす力がまた散らす」の句を、「鑑賞」「現代の俳句」で暮目良雨氏が鑑賞。

山茶花は不思議な花。懸命に咲かせるかと思うと、懸命に散らせている。咲かす力が散らせる力と一緒にあると気づいた作者の安堵感がある句。

奥山テル子さんの句、「初蝶」4月号に4月13日に亡くなられた山形の奥山さんの「万象」掲載1月号の句「育てて来し菊もて桜おほひけり」が「誌々風信」に紹介され、鈴木正子氏が鑑賞。

これまで丹精込めて育てていた菊作りの方が亡くなってしまった。遺言があったのかは解らないが、それとも生前に家

族に話しておつたのか、入棺の時の、遺体を飾る桜の花は自分が育てた菊の花で……と何とも悲しい思いがこみ上げてくる。誰にでもいつかは別れの時が来るのであるが、人はみな一回限りの人生を懸命に生き、生きてきた道は全て尊いものである。菊の香に生前の清らかな面影が浮かぶ。切なさが滲む心痛む思いであるが、森閑とした世界の悲しさを共に際立たせ、この孤高に惹かれる。

テル子さんのご冥福をお祈りします。

静岡県より入賞者続出

平成二十九年年度「静岡市民文芸」奨励賞

一村を囲む火の色虫送り 石川裕子

納骨の背に残鶯の頻りなり 岩崎武士

立ち漕ぎの自転車行くや大夕焼 加山ひさ子

ふらここを静かに揺らす喪服着て 新川澄子

職安に猫背正すや雲の峰 藤原千代子

水底に緩なす光小六月 吉野美智子

第五十四回ふじ市民文芸 奨励賞

岳麓のからりと晴れてとんぼ湧く 神田美穂子

第十五回「富士山を詠む」俳句賞佳作

杜氏来る富士に初雪来て十日 神田美穂子

第七回「静岡産業大学俳句コンテスト」

最優秀作品・有馬賞
凍蝶の翅に残りし空の色 藤原千代子

お知らせ

第五十三回子規顕彰全国俳句大会作品募集 9月23日、松山市立子規記念博物館で開催される大会の俳句作品を、6月30日必着で募集中。二句一組五百円。

選者は稲畑汀子氏以下五名。応募用紙は中央句会等で希望者に配布。ホームページからもダウンロードできます。

根岸子規庵の句の応募は如何？

(報・江見悦子)

『珈琲タイム』の解答

【問1】 1 ウ 2 イ 3 エ

4 ア 5 ウ 6 エ

【問2】 1 やもり 2 ほととぎす

3 くいな 4 はも

5 こがねむし 6 なめくじ

【問3】 1 牛の下↓牛の舌

2 飽きざりき↓飽かざりき

3 植へて↓植ゑて

4 あほぎ↓あふぎ

新規会員を紹介します	
姓	号
郵便番号	〒
住	所

投句者住所 〒

投句者姓号

電話

あとがき

▽今月号から、副主宰から顧問まで七名の作品頁を「風音集」と名付けました。同人会の役員改選に伴い、前会長の福島せいぎさんと前幹事長の内藤恵子さんが新顧問になりました。

万象俳句会と同人会の組織・業務分担については、五月号79頁をご覧になつて下さい。

(江見)

▽万象俳句賞の締切が近づいています。応募方法がこれまでと変わつていきますので、お間違えのないよう裏表紙の要項をご確認下さい。多くのご応募をお待ちしています。

(文代)

▽少子化が進み、母校の小学校への新入生は昨年に比べ、ほぼひとクラス分減少しました。町内の65歳以上の一人暮らし世帯は増え続けています。俳句人口の高齢化と同じ現象が起きているような気がします。

(茂)

▽「六月を綺麗な風の吹くことよ」今年の子規と、分類好きの子規が「畏友」と呼んだ漱石の生誕百五十周年。

『子規漱石往復書簡集』（岩波文庫）を読むと、友達はいいなあとつくづく思わされます。

(千久)

▽四月に神奈川県支部、五月に千葉県支部の吟行句会があり、県外からも多くの方が参加され交流を深めました。六月には東京支部の吟行句会があり、支部の垣根を超えた句会活動の活性化が期待されます。

(規子)

▽六月：雨。六篇の「雨」の詩からなる男声合唱組曲がある。内、八木重吉の「雨」。「雨のおとがきこえる 雨がふつていたのだ。あのおとのようにそつと 世のためにはたらいいていよう」久しぶりに聞いてみようと思う。

(英俊)

▽畠に煙が立ち上り、空豆の花を見つめました。ポストへ往復する度に畠を覗くのが楽しみです。落ばんばは葉の下に見えなくなりました。二百号記念の原稿をお待ちしています。

(純)

▽総務として情報の共有を主目的に、編集に携わる事になりました。何が出るか不安ですが宜しく願います。

(内田)

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

半年分 六、〇〇〇円
一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更等 住所変更、退会等については左記にご連絡願います。

〒285・0922

千葉県印旛郡酒々井町中央台1-17-12 竹澤誠治

万象 六月号

平成三十年六月一日 発行
第十七巻第三号
通巻第一九五号

主 宰 内 海 良 太
発行人 小 林 愛 子
編集人 江 見 悦 子

〒241-0816
横浜市旭区笹野台三-二六-二

万象発行所

☎〇四五-一三六一七五九一

第十六回万象俳句賞作品募集

万象俳句賞は毎年一回、広く作品を募り優秀作を表彰、「万象」俳句の向上、発展に資するもので、多数の応募を期待いたします。第十六回募集の細目は次の通り。

作品 一人二十句、未発表新作に限る

四百字詰原稿用紙の体裁（B4判）とし、冒頭欄外に題名を記入のこと

一通（コピー可）提出、原稿は担当者が活字化し、コピーしたものを選者に送ります。末尾欄外に住所、姓号を明記のこと

他のものを同封しない。封筒に「万象俳句賞応募」と朱書のこと

選者

大坪 景章 内海 良太 小林 愛子 飛高 隆夫 福島せいぎ

原田しずえ 山田 春生 江見 悦子 田村 愛子 中村 千久

応募資格 「万象」同人、会員に限る

締切 平成三十年六月二十日

宛先 〒244 110816 横浜市旭区笹野台三一・二六・一二 万象発行所

入賞発表 「万象」十月号。全国俳句大会で、作品一席に万象俳句賞を贈る